

# 泉南市遺跡群発掘調査報告書XXV

泉南市文化財調査報告書 第四十八集

2008. 3

泉南市教育委員会



## 序 文

泉南市は、大阪府南部に位置し南を和泉山脈、北を大阪湾に囲まれた自然豊かなまちです。この豊かな自然に生まれ、本市には古くから人々が生活し数多くの遺跡が残されています。

これらの遺跡は私たち先祖の残した貴重な文化遺産ですが、近年宅地等の開発が盛んとなり、この貴重な文化遺産が破壊に危機にさらされていることも少なくありません。

これらの開発に対処するため本市では、埋蔵文化財の発掘調査、整理作業を順次進め、地域開発との調整と遺跡の保護活用に努めております。本書により、本市の歴史解明、文化財保護に対する理解の一助となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、調査にご協力頂きました地元土地所有者、近隣住民の皆様、並びに関係諸機関の方々には、深く感謝の意を述べさせていただきますと同時に、今後とも本市の文化財行政により一層のご理解、ご指導を賜りますようお願い申し上げます。

平成 20 年 3 月

泉南市教育委員会  
教育長 梶本 邦光

## 例 言

1. 本書は、泉南市教育委員会が平成19年度国庫補助事業として計画し、生涯学習課が実施した泉南市遺跡群の緊急発掘調査事業の報告書である。
2. 調査は、泉南市教育委員会生涯学習課、石橋広和・城野博文・河田泰之を担当者とし、平成19年4月1日に着手し、平成20年3月31日に終了した。なお、本書に掲載している内容は、平成19年1月1日から平成19年12月31日までのものである。
3. 現地調査および整理の実施にあたっては蒲生徹幸、蔵田弘幸、藤野 渉、真鍋紀美子諸君らの協力を得た。
4. 本書の執筆は第1章を石橋が、第2章第9節を河田が行い、その他については城野が行った。編集は城野が行った。
5. 現地調査における写真撮影は各担当者が行い、出土遺物の写真撮影は城野が行った。
6. 調査における出土遺物および図面、写真などの諸記録は、泉南市埋蔵文化財センターにおいて保管している。広く活用されることを望むものである。

## 凡 例

1. 各調査区には個別の番号を付した。番号の構成は、「遺跡略称-調査年度-通し番号」である。遺跡略称は、男里遺跡-ON、光平寺跡-KH、長山遺跡-NG、岡田遺跡-OKD、岡田西遺跡-OKDW、大苗代遺跡-ONS、仏性寺跡-BS、狐池遺跡-KI、兎田遺跡-USである。調査年度は西暦の上位2桁を省略して表記している。
2. 図中の方位は、PL. 1・2では真北を、各調査区位置図・地形図では国土座標VI系にもとづく座標北を、各調査区平面図では磁北をあらわしている。
3. 図版中に示したレベル高は、T.P. +(m)の数値を使用しているが、T.P. +は省略している。
4. 本書で扱う地形分類図は、豊田兼典氏が作成した。(PL. 2)
5. 遺構名称は、遺構の種類を表すアルファベットと任意の数値の組合せで表記している。本書にて扱う遺構の種類はPit-ピット、SD-溝である。
6. 遺物実測図の断面は、須恵器-黒塗り、瓦器、瓦質土器、瓦-トーン、その他-白抜きのように区分している。
7. 遺物実測図と写真図版において遺物番号は統一している。

## 目 次

第1章	調査の経過	1
第2章	男里遺跡の調査	
	第1節 既往の調査	4
	第2節 07-1 区の調査	6
	第3節 07-2 区の調査	6
	第4節 07-3 区の調査	7
	第5節 07-4 区の調査	8
	第6節 07-5 区の調査	9
	第7節 07-6 区の調査	10
	第8節 07-7 区の調査	11
	第9節 06-10 区の調査	12
	第10節 06-11 区の調査	13
	第11節 06-12 区の調査	13
	第12節 06-13 区の調査	14
	第13節 06-14 区の調査	15
	第14節 06-15 区の調査	15
第3章	光平寺跡の調査	
	第1節 既往の調査	17
	第2節 07-1 区の調査	19
第4章	長山遺跡の調査	
	第1節 既往の調査	25
	第2節 07-1 区の調査	25
第5章	岡田遺跡の調査	
	第1節 既往の調査	26
	第2節 07-1 区の調査	26
	第3節 07-2 区の調査	27
第6章	大苗代遺跡の調査	
	第1節 既往の調査	28
	第2節 07-1 区の調査	28
第7章	仏性寺跡の調査	
	第1節 既往の調査	30
	第2節 07-1 区の調査	30
第8章	兔田遺跡の調査	
	第1節 既往の調査	32
	第2節 07-1 区の調査	32
	第3節 07-2 区の調査	33
第9章	まとめ	35
	報告書抄録	巻末

## 挿図目次

第1図	男里遺跡・光平寺跡・長山遺跡調査区位置図	5
第2図	男里遺跡 07-1・2・3・4 区、06-12・13・14 区地形図	6
第3図	男里遺跡出土遺物	7
第4図	男里遺跡 07-5 区・06-15 区地形図	9
第5図	男里遺跡 07-6 区地形図	10

第6図	男里遺跡 07-7 区地形図	11
第7図	男里遺跡 06-10 区地形図	12
第8図	男里遺跡 06-11 区地形図	13
第9図	光平寺跡 1978 年度調査出土の軒瓦	18
第10図	光平寺跡 07-1 区地形図	19
第11図	光平寺跡 07-1 区出土遺物①	20
第12図	光平寺跡 07-1 区出土遺物②	21
第13図	光平寺跡 07-1 区出土遺物③	22
第14図	長山遺跡 07-1 区地形図	25
第15図	岡田遺跡調査区位置図	26
第16図	岡田遺跡 07-1 区地形図	26
第17図	岡田遺跡 07-2 区地形図	27
第18図	大苗代遺跡 07-1 区地形図	28
第19図	岡田西遺跡・大苗代遺跡・仏性寺跡・狐池遺跡調査区位置図	29
第20図	仏性寺跡 07-1 区地形図	30
第21図	兎田遺跡調査区位置図	32
第22図	兎田遺跡 07-1 区地形図	32
第23図	兎田遺跡 07-1 区出土遺物	33
第24図	兎田遺跡 07-2 区位置図	33

## 表目次

第1表	平成19年発掘および試掘調査届出一覧表	1
第2表	発掘調査一覧表	2
第3表	試掘調査一覧表	3
第4表	立会調査一覧表	3
第5表	文化財一覧表	38

## 図版目次

PL. 1	泉南地域の文化財
PL. 2	泉南地域の地形分類
PL. 3	男里遺跡①調査区
PL. 4	男里遺跡②、光平寺跡調査区
PL. 5	長山遺跡、岡田遺跡、大苗代遺跡、仏性寺跡、兎田遺跡調査区
PL. 6	男里遺跡 07-1・2・3 区
PL. 7	男里遺跡 07-4・5・6 区
PL. 8	男里遺跡 07-7 区
PL. 9	男里遺跡 06-10・11・12 区
PL. 10	男里遺跡 06-13・14・15 区
PL. 11	光平寺跡 07-1 区、長山遺跡 07-1 区、岡田遺跡 07-1 区
PL. 12	岡田遺跡 07-2 区、大苗代遺跡 07-1 区、仏性寺跡 07-1 区
PL. 13	兎田遺跡 07-1・2 区・出土遺物①
PL. 14	出土遺物②
PL. 15	出土遺物③
PL. 16	出土遺物④
PL. 17	光平寺跡 1978 年度調査出土遺物

# 泉南市遺跡群発掘調査報告書XXV

## 第1章 調査の経過

平成19年における土木工事に伴う届出の状況は、第1表のとおり遺跡内外を問わず一昨年来に引き続き高い数値を示している。これは、泉南市において近年まで主要産業のひとつであった繊維産業の衰退により多くの工場用地が宅地等に姿を変えていることもひとつの要因になっており、市域の平野部では宅地化に伴う調査は増大してゆくものと考えられる。

このような状況のもと第2・3表のとおり調査が行われた。このうち本書で報告するのは7遺跡、15調査区である。また6件については平成18年度未報告分の調査を掲載している。それぞれの遺跡について調査の経過を述べたい。

男里遺跡は、毎年最も多くの届出、調査が行われる遺跡である。今年度は昨年度と同じく現男里集落内の調査よりも、遺跡南東部の馬場地区での調査が多い結果となった。今年度は7件の調査が行われ、昨年度未報告の6件の調査を併せて報告している。

光平寺跡は、現男里集落に重複しており、大規模な調査はあまり行われていないものの寺院に関連する遺構・遺物がある程度見つかっている。今年度は寺域の推定地の東端部分で1件の調査が行われ報告している。

長山遺跡は、南北に細長い形状を呈した遺跡である。立地から大規模な開発は少ないものの個人住宅に伴う調査はある程度行われている。今年度は1件の調査が行われ報告している。

岡田遺跡は、男里遺跡に次ぐ規模を持ち、調査件数もこれまでに男里遺跡に次ぐ件数が行われているが、ここ数年は個人住宅等の小規模な調査が多くなっている。今年度は遺跡のほぼ中心で2件の調査が行われ報告している。

大苗代遺跡は、共同住宅に伴う試掘調査で発見され、調査が行われた遺跡である。今年度は遺跡発見の契機となった共同住宅の西に隣接した地区で1件の調査が行われ報告している。

仏性寺跡は、古くから中世寺院として知られているが、伽藍に直接かかわる遺構は検出されていない。今年度は遺跡の北部で1件の調査が行われ報告している。

兎田遺跡は、現兎田集落とほぼ重複しているため、これまでの調査のほとんどが住宅の建て替え等に伴う調査である。今年度も集落内部で2件の調査が行われ報告している。

第1表 平成19年度発掘および試掘調査届出一覧表

平成19年12月31日現在

年月	発掘		試掘		合計	
	件数	面積(m <sup>2</sup> )	件数	面積(m <sup>2</sup> )	件数	面積(m <sup>2</sup> )
19年1月	11	7,470.95	2	1,520.11	13	8,991.06
2月	10	1,394.06	3	4,475.79	13	5,869.85
3月	12	2,045.51	5	6,964.09	17	9,009.60
4月	4	716.66	5	8,902.83	9	9,619.49
5月	6	1,093.11	2	24,195.04	8	25,288.15
6月	6	744.79	3	3,446.06	9	4,190.85
7月	11	1,967.01	5	7,388.37	16	9,355.38
8月	10	10,117.66	3	2,178.33	13	12,295.99
9月	4	715.93	2	1,401.21	6	2,117.14
10月	7	2,389.37	1	493.10	8	2,882.47
11月	6	807.82	5	7,994.98	11	8,802.80
12月	4	3,200.73	2	17,736.00	6	20,936.73
合計	91	32,663.60	38	86,695.91	129	119,359.51

第2表 発掘調査一覧表

平成19年12月31日現在

No.	遺跡名	地区名	位置	面積(m <sup>2</sup> )	用途	調査年月	備考
1	男里遺跡	07-1区	馬場	140.46	個人住宅	19年10月	本書掲載 ⑬-40
2	男里遺跡	07-2区	馬場	140.14	個人住宅	19年11月	同上 ⑬-48
3	男里遺跡	07-3区	馬場	140.45	個人住宅	19年8月	同上 ⑬-36
4	男里遺跡	07-4区	馬場	138.23	個人住宅	19年10月	同上 ⑬-39
5	男里遺跡	07-5区	幡代	438.35	個人住宅	19年4月	同上 ⑬-82
6	男里遺跡	07-6区	男里	350.94	個人住宅	19年5月	同上 ⑬-1
7	男里遺跡	07-7区	男里	382.83	共同住宅	19年6月	同上(確認調査) ⑬-9
8	男里遺跡	06-10区	男里	342.93	店舗併用住宅	19年1月	同上(確認調査) ⑬-42
9	男里遺跡	06-11区	男里	222.20	個人住宅	19年1月	同上 ⑬-53
10	男里遺跡	06-12区	馬場	141.14	分譲住宅	19年1月	同上(確認調査) ⑬-55
11	男里遺跡	06-13区	馬場	138.23	分譲住宅	19年1月	同上(確認調査) ⑬-56
12	男里遺跡	06-14区	馬場	140.16	分譲住宅	19年1月	同上(確認調査) ⑬-57
13	男里遺跡	06-15区	男里	150.39	個人住宅	19年2月	同上 ⑬-59
14	男里遺跡 光平寺跡	07-1区	男里	135.03	個人住宅	19年8月	同上 ⑬-25
15	長山遺跡	07-1区	馬場	419.96	分譲住宅	19年8月	同上(確認調査) ⑬-30
16	岡田西遺跡	06-1区	中小路	6,097.18	特別養護老人ホーム	19年2月	トレンチ3ヵ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。(確認調査、第19図) ⑬-61
17	岡田遺跡	07-1区	岡田	200.75	個人住宅	19年7月	本書掲載 ⑬-20
18	岡田遺跡	07-2区	岡田	255.93	個人住宅	19年10月	同上 ⑬-43
19	岡田遺跡	06-1区	中小路	25,537.43	土砂採集	19年3月	トレンチ2ヵ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。(確認調査、第15図) ⑬-12
20	大苗代遺跡	07-1区	信達大苗代	137.67	個人住宅	19年11月	本書掲載 ⑬-46
21	仏性寺跡	07-1区	信達大苗代	1,257.18	介護施設	19年12月	同上(確認調査) ⑬-47
22	狐池遺跡	07-1区	新家 信達大苗代	7,363.31	宅地造成	19年12月	トレンチ1ヵ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。(確認調査、第19図) ⑬-37
23	兎田遺跡	07-1区	兎田	596.93	個人住宅	19年9月	本書掲載 ⑬-34
24	兎田遺跡	07-2区	兎田	389.74	個人住宅	19年7月	同上 ⑬-21

### 第3表 試掘調査一覧表

平成19年12月31日現在

No.	遺跡名	位置	面積 (㎡)	用途	調査年月日	備考
1	範囲外	信達市場	910.86	宅地造成	平成19年2月8日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
2	範囲外	信達牧野	888.95	店舗	平成19年2月13日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
3	範囲外	樽井	972.41	共同住宅	平成19年3月6日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
4	範囲外	新家	645.78	宅地造成	平成19年3月15日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
5	範囲外	信達市場	1,211.67	分譲住宅	平成19年3月27日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
6	範囲外	信達市場	2,134.23	宅地造成	平成19年4月4日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
7	範囲外	樽井	433.87	宅地造成	平成19年4月6日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
8	範囲外	馬場	1,211.67	工場	平成19年4月18日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
9	範囲外	信達牧野	2,482.01	宅地造成	平成19年4月20日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
10	範囲外	信達市場	1,205.67	診療所	平成19年4月26日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
11	範囲外	信達市場	532.44	宅地造成	平成19年4月27日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
12	範囲外	新家	2,095.55	診療所	平成19年5月31日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
13	範囲外	樽井	1,907.69	宅地造成	平成19年6月1日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
14	範囲外	樽井	1,239.03	共同住宅	平成19年6月11日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
15	範囲外	信達牧野	987.86	宅地造成	平成19年6月25日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
16	範囲外	樽井	409.54	宅地造成	平成19年8月6日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
17	範囲外	樽井	498.43	宅地造成	平成19年8月8日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
18	範囲外	新家	4,379.44	宅地造成	平成19年8月27日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
19	範囲外	信達牧野	1,063.87	共同住宅	平成19年9月5日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
20	範囲外	樽井	861.98	宅地造成	平成19年9月20日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
21	範囲外	樽井	4,421.87	宅地造成	平成19年9月27日	トレンチ3カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
22	範囲外	樽井	450.93	宅地造成	平成19年10月10日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
23	範囲外	信達市場	994.75	店舗	平成19年10月16日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
24	範囲外	信達市場	774.41	共同住宅	平成19年11月7日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
25	範囲外	樽井	881.71	店舗付診療所	平成19年12月5日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
26	範囲外	信達市場	1,639.41	宗教施設	平成19年12月18日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。

### 第4表 立会調査一覧表

平成19年12月31日現在

No.	遺跡名	位置	面積 (㎡)	用途	調査年月日	備考
1	男里遺跡	馬場	272.77	倉庫	平成19年1月22日	遺構・遺物は確認されなかった。
2	男里遺跡	男里	96.00	農業関係	平成19年1月25日 ～2月9日	古墳～中世の遺構面および遺物を確認した
3	岡田東遺跡	北野	105.05	ガ ス	平成19年3月7日	遺構・遺物は確認されなかった。
4	長山遺跡	馬場	66.00	ガ ス	平成19年3月16・29日	遺構・遺物は確認されなかった。
5	男里遺跡	男里	150.81	分譲住宅	平成19年3月22・23日	遺構・遺物は確認されなかった。
6	男里遺跡	男里	151.09	分譲住宅	平成19年3月22・23日	遺構・遺物は確認されなかった。
7	男里遺跡	男里	151.04	分譲住宅	平成19年3月22・23日	遺構・遺物は確認されなかった。
8	男里遺跡	樽井	20.00	電話通信	平成19年4月9日	遺構・遺物は確認されなかった。
9	男里遺跡	男里	150.86	分譲住宅	平成19年4月19日	遺構・遺物は確認されなかった。
10	男里遺跡	男里	206.32	分譲住宅	平成19年4月19日	遺構・遺物は確認されなかった。
11	男里遺跡	男里	229.01	分譲住宅	平成19年4月19日	遺構・遺物は確認されなかった。
12	海会寺跡	信達大苗代	104.54	個人住宅	平成19年6月20日	遺構・遺物は確認されなかった。
13	男里遺跡	幡代	7.50	ガ ス	平成19年7月5日	遺構・遺物は確認されなかった。
14	男里遺跡	男里	139.10	個人住宅	平成19年8月20日	遺構・遺物は確認されなかった。
15	男里遺跡	馬場	145.46	個人住宅	平成19年8月31日	遺構・遺物は確認されなかった。
16	男里遺跡	馬場	135.75	個人住宅	平成19年9月13日	遺構・遺物は確認されなかった。
17	男里遺跡	馬場	135.75	個人住宅	平成19年10月15日	遺構・遺物は確認されなかった。
18	男里遺跡	男里	137.83	個人住宅	平成19年10月17日	遺構・遺物は確認されなかった。
19	男里遺跡	馬場	145.57	個人住宅	平成19年10月31日	遺構・遺物は確認されなかった。
20	北野遺跡	信達大苗代	121.52	個人住宅	平成19年12月13日	遺構・遺物は確認されなかった。

## 第2章 男里遺跡の調査

### 第1節 既往の調査（PL. 1、2）

男里遺跡は市域平野部の北西端に位置し、男里川右岸に形成された沖積地上に展開する旧石器時代から近世に至る複合遺跡である。

地形的には、遺跡中央に位置する金熊寺川旧河道によって形成された氾濫原を主とし、氾濫原東縁に沖積段丘が、さらに遺跡西縁を流れる現河道に沿っては自然堤防が発達している。現在、段丘上には馬場集落があり、自然堤防上には男里集落が立地する。氾濫原は主に耕作地として利用されているが、近年氾濫原と段丘との境界を縫うように大規模な府道が建設されたことで、新たな開発が増加し、周辺の景観も大きく様変わりしつつある。

男里遺跡では、昭和50年代より本市教育委員会をはじめとして、大阪府教育委員会や（財）大阪府文化財センター等による発掘調査が実施され、調査件数の多寡では市内では群を抜くものである。こうした調査によって、これまでに旧石器時代にはじまる数多くの成果が蓄積されており、各時代の大きな分布も知られつつある。以下にその概要を述べる。

縄文時代後期以前の資料<sup>①</sup>は採集品や二次移動を受けたことが明らかなものに限られ、現状ではまともを見出すことはできない。縄文後期から晩期には遺跡中央から北西部、氾濫原に属する地点に活動の中心が求められる。遺跡中央に位置する双子上池堤体部の調査では長原式期と弥生時代前期の土器が同一の包含層より出土している<sup>②</sup>。弥生時代前期には双子池の南方に遺跡が展開するものと推定されるが、資料が限定的であり明確さに欠ける。

弥生時代中期には遺跡の南東部にあたる沖積段丘上において、30数棟の竪穴住居をはじめ、掘立柱建物や方形周溝墓、木棺墓などからなる集落が展開する<sup>③</sup>。集落の西側には自然流路を利用した大溝が存在し、絵画土器を含む多量の遺物が出土している。

古墳時代前期には双子池周辺において掘立柱建物や井戸よりなる集落<sup>④</sup>が存在し、後期には遺跡の北西縁部にあたる氾濫原上において竪穴住居<sup>⑤</sup>が確認されている。中期に属する資料は今のところ知らない。

飛鳥、奈良時代には遺跡北西縁部での活動が縮小され、双子池の周辺へと活動の中心が移動する<sup>⑥</sup>。平安時代には遺跡の北西部<sup>⑦</sup>に加えて、北東部の沖積段丘上においても掘立柱建物<sup>⑧</sup>などが確認されるようになる。遺跡北西に隣接する戎畑遺跡<sup>⑨</sup>において当該期の大規模な灌漑用水路が確認されていることなどから、生産力の向上に裏打ちされた集落範囲の拡大と捉えることができるだろう。

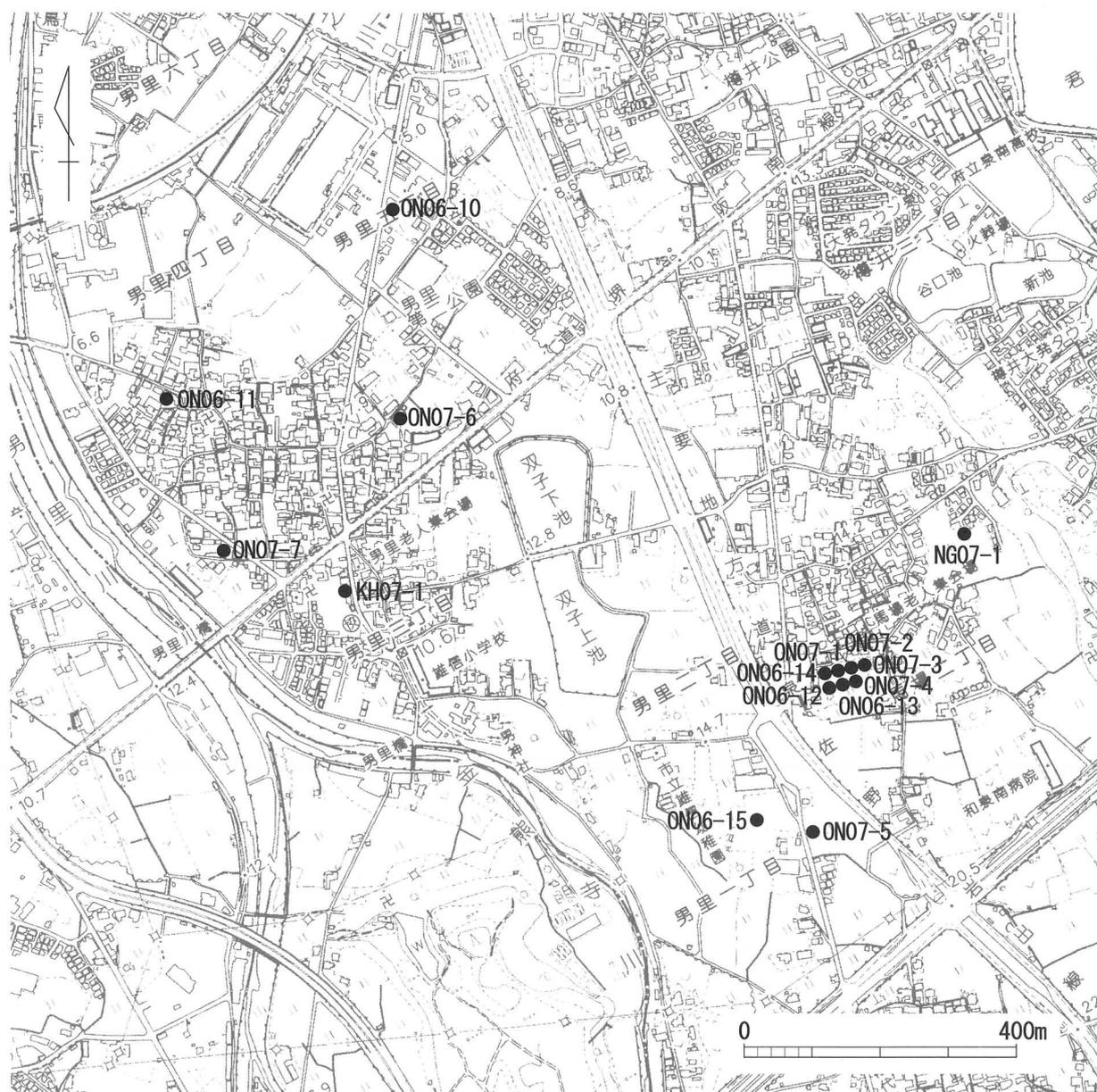
中世になると遺跡北西縁部や北部などの前代から連続する集落に加えて、遺跡西部<sup>⑩</sup>や南東部において新たな集落が出現する。前者は男里集落、後者は馬場集落の初源と位置づけることが可能であり、南東部の集落は後述する06-8区<sup>⑪</sup>周辺に展開する一群と、さらに南に展開する一群<sup>⑫</sup>がある。後者では鍛冶炉と考えられる遺構や12世紀の遺物が顕著に出土しているが、長くは存続せず13世紀代には廃絶しているようである。

昨年度、遺跡南西部において宅地開発に伴って実施された06-8区では13世紀から14世紀に属する集落が確認された。集落では掘立柱建物が1棟をはじめとする多くのピットや、隅丸長方形のプラン

を持つ土坑が、3基隣接して発見された。うち1基の土坑からは多量の土師器皿を主とする遺物が出土し、祭祀的な用途を強く連想させるものであった。他に集石遺構や石組の井戸などが確認されている。井戸埋土からは14世紀代の遺物が多量に出土しており、集落の廃絶時期を示すものと考えられる。

集落廃絶後、大規模な2条の溝（「流路1、2」）が設けられている。溝は長軸を南北に向け、4～5mの間隔で平行するもので、幅4～6m、深さ1.2mを測るほぼ同規模のものである。出土遺物は先行する集落に伴うと考えられるものが大半を占めるため、明確な時期を求めがたいが、いずれにしても14世紀以降に設けられたものとしてはかなり規模の大きな溝であるといえる。集落廃絶後の耕地開発に関連するものであろうか。

こうした中世後半を画期とする集落の動向はいわゆる集村化現象として捉えることができ、市内の遺跡でもいくつかの例<sup>9</sup>を挙げるができる。中世後半以降に形成された集落は、伝統的景観を形成し、現在まで連なっている。



第1図 男里遺跡・光平寺跡・長山遺跡調査区位置図

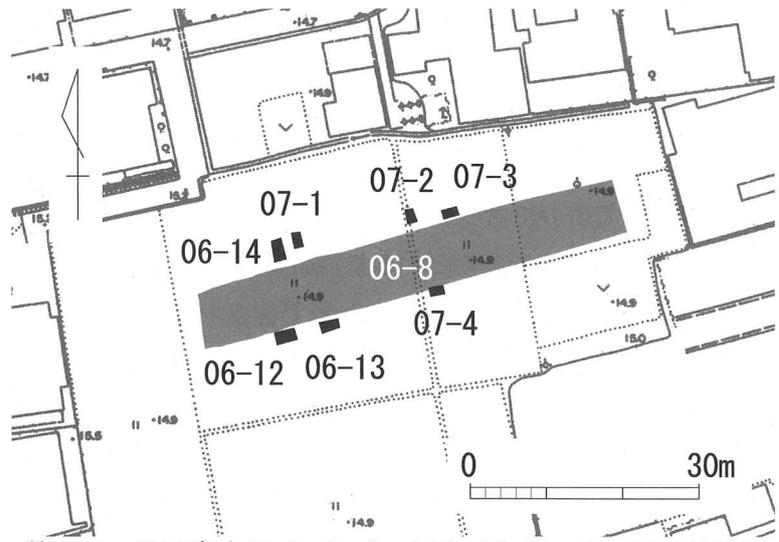
## 第2節 07-1区の調査

### 1. 位置 (第1、2図)

調査区は遺跡南東部、現馬場集落の南西端に位置し、06-8区のトレンチ北辺より北に約2mの距離にある。一連の調査区との位置関係では、西約1mに06-14区、東約18mに07-2区が位置する。

06-8区のうち、本調査区の南西側では1棟の掘立柱建物を含む、多くのピットが確認され、南東約10mの地点では多量の土師器が出土した土坑が確認されている。

地形的には沖積段丘の北西縁に属する。トレンチは1ヵ所設定した。



第2図 男里遺跡 07-1・2・3・4区、06-12・13・14区地形図

### 2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 3、6)

造成に伴う盛土(1層、約1m)、現代耕作土である灰黒色土(2層、約20~30cm)、にぶい黄褐色混じり淡褐色砂質土(3層、約10~20cm)と続き、地山であるにぶい黄褐色シルトへと至る。このうち第3層は地山ブロックが多く混入し、わずかに中世の遺物を含む。また地山上面には同層を埋土とする乾痕が著しくみられ、かつて地表に露出していたことがわかる。地山上面において遺構が確認された。

### 3. 遺構 (PL. 3、6)

確認された遺構は溝(SD01)である。トレンチ南端部において確認された。長軸をE-15°-Nに向ける直線溝で、検出長1m、幅40cm以上、確認面よりの深さ20cmを測る。断面形状は口の開いた椀形を呈する。埋土は第3層であり、土師器や瓦器の細片を僅かに含む。SD01は06-14区においても確認されており、その延長は4m以上を測る。

## 第3節 07-2区の調査

### 1. 位置 (第1、2図)

調査区は、06-8区中央部の北約2mに位置し、東約5mには07-3区が位置する。06-8区では本調査区の南西直近部で大規模な溝(流路2)が確認されている。トレンチは1ヵ所設定した。

## 2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 3、6)

宅地造成に伴う盛土 (1層、約 80 ~ 130 cm) および、同じく盛土である淡褐色礫混土 (2層、約 30 ~ 60 cm) によって元来の層序はかなり失われている。トレンチの北端部にのみ盛土以下に近現代の耕作土である暗灰色土 (3層、約 20 cm) が残るが、大半の地点では淡褐色シルト (4層、約 40 cm) の上面にまで盛土 (=地盤改良) による攪乱が及んでいる。第4層は中世の遺物を含み、07-1 区における第3層に相当するものと考えられる。第4層直下は基本的に地山であるにぶい黄褐色礫混粘土が広がるが、トレンチ北半部にのみ暗黄褐色混じり淡褐色礫含土 (5層、約 20 cm) が認められる。

このうち第4層および地山上面において精査を行ったが、遺構は確認されなかった。これは地山の状況が隣接する 06-8 区などとは状況が異なり、若干不安定なことによるものかも知れない。

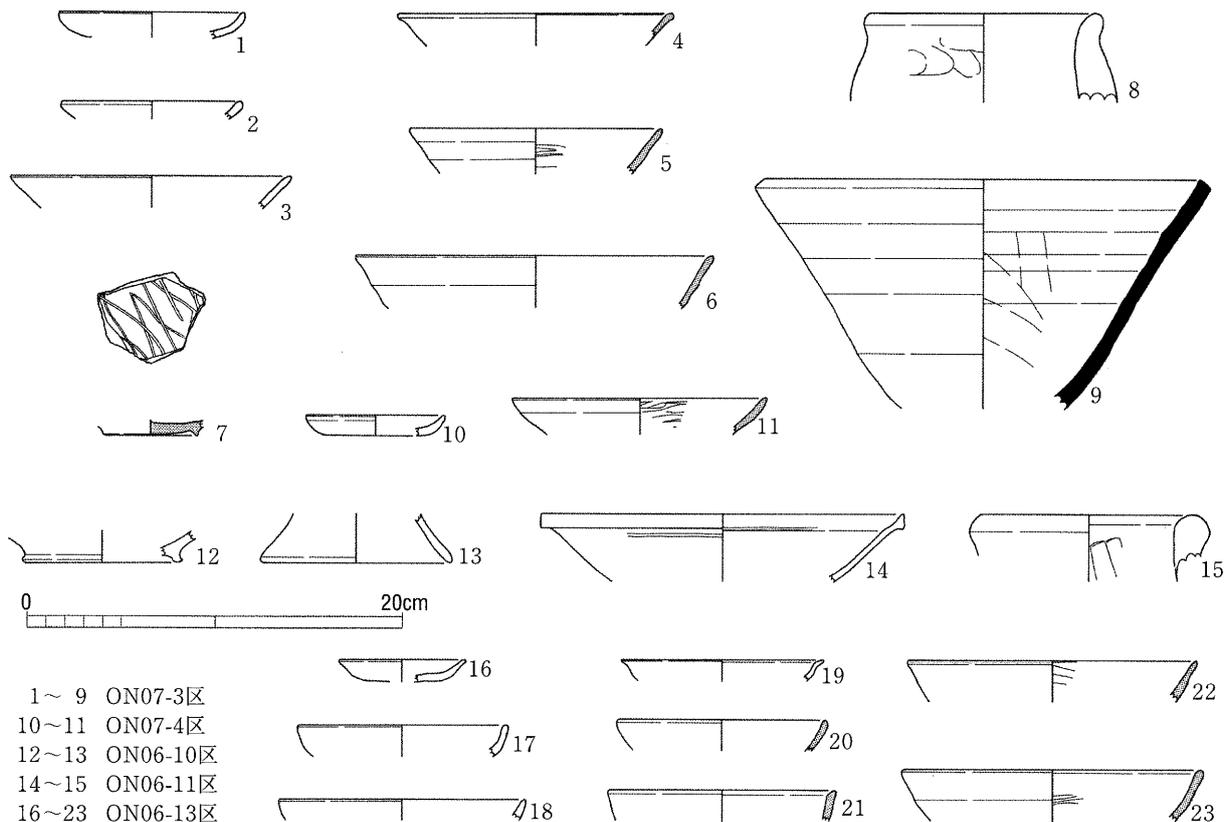
## 第4節 07 - 3 区の調査

### 1. 位置 (第1、2図)

調査区は 07-2 区の東約 5 m に位置する。06-8 区では本調査区の南に大規模な溝 (流路 1) が確認されている。トレンチは 1 ヶ所設定した。

### 2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 3、6)

宅地造成に伴う盛土 (1層、約 90 cm) および旧表土 (2層、約 20 cm) を除去すると、暗灰褐色砂質シルト (3層、約 15 cm)、淡褐灰色土 (4層、約 10 cm) が概ね水平堆積を呈する。第3層は現代耕



第3図 男里遺跡出土遺物

作土、第4層は旧耕作土と考えられる。以下、基本的には暗褐色混じり淡褐色砂質土（5層、約10cm）を経て地山であるにぶい黄褐色シルトへと至る。第5層は06-8区の成果より中世包含層と捉えることが可能である。また地山面には第4、5層による染込みが多く存在し、それらに伴う若干の凹凸が生じているが、巨視的には東から西へと緩やかに傾斜するものである。染込みは明確な輪郭を持たないものが大半であるが、中には耕作痕と捉えることが可能なものも含まれる。

### 3. 遺構 (PL. 3、6)

トレンチ東端部において南北方向へと伸びる落ち込みが確認された。平面的には確認できなかったが、断面観察によると幅30cm、深さ25cmを測る直線状の肩を持つ落ち込みである。落ち込み西端において第5層上面より切り込まれていることが確認できる。埋土は地山ブロックを多く含む褐色質シルトであり、土師器、瓦器、土師質真蛸壺などの細片が出土している。06-8区との位置関係によって、06-8区における大規模な溝のうち東側に位置する「流路1」の西肩部であるものと判断される。「流路1」は幅5.4m、深さ1.5mを測るもので、06-8区から本調査区までの延長は約10mとなる。

トレンチ東壁沿いにおいて径20cm、深さ8cmを測るピットが確認された。トレンチ外へと伸びるため、全容は明らかでない。埋土は淡暗褐色砂質シルトである。遺物は出土しなかった。「流路1」以前の下層遺構であり、06-8区におけるピット群に対応するものと考えられる。

### 4. 遺物 (PL. 14、第3図)

出土遺物には土師器、須恵器、瓦器、土師質真蛸壺などがある。いずれも層位的な取り上げができなかったため断定はできないが、第5層もしくは落ち込み埋土からの出土と考えられる。

1、2は土師器小皿の口縁部である。いずれも口縁部を強くヨコナデする。3は土師器甕の口縁部である。頸部から外傾し、直線的に立ち上がる。4～7は瓦器碗である。4～6は口縁部であり、いずれも口縁端部のみが横ナデされる。4は口縁端部が外反する。5の体部内面には圏線ミガキが認められる。7は断面三角形の貼り付け高台を持ち、見込みには平行線状のミガキが疎に施される。9は東播系須恵器の鉢である。体部内外面ともに回転ナデによって成形し、体部内面のみ斜め方向のナデを加える。口縁端部はナデにより平滑に仕上げる。8は土師質真蛸壺の口縁部である。口縁端部がわずかに外反する。頸部に指頭圧痕が顕著に残る。

## 第5節 07-4区の調査

### 1. 位置 (第1、2図)

調査区は07-3区の南約10m、06-8区をはさんで南北に対峙する位置にある。06-8区では本調査区の北側において多くのピットや土坑が確認されている。トレンチは1ヵ所設定した。

### 2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 3、7)

造成に伴う盛土（1層、約1m）、現代耕作土である灰黒色土（2層、約20cm）、にぶい黄褐色混じり淡褐色砂質土（3層、約10cm）と続き、地山であるにぶい黄褐色シルトへと至る。このうち第3層

は地山ブロックを多く含み、僅かに中世の遺物を含む。また地山上面には第3層を埋土とする乾痕が著しくみられ、かつて地表に露出していたことがわかる。地山上面において遺構が確認された。

### 3. 遺構 (PL. 3、7)

遺構はピットおよび杭穴と考えられる小穴が確認された。ピットはいずれもいびつな円形を呈し、径 25 cm、確認面よりの深さ 10 cm を測る。埋土は Pit 1、2 は淡暗褐色シルトであり、Pit 3 は第3層であった。いずれも柱痕跡は認められなかった。

### 4. 遺物 (PL. 14、第3図)

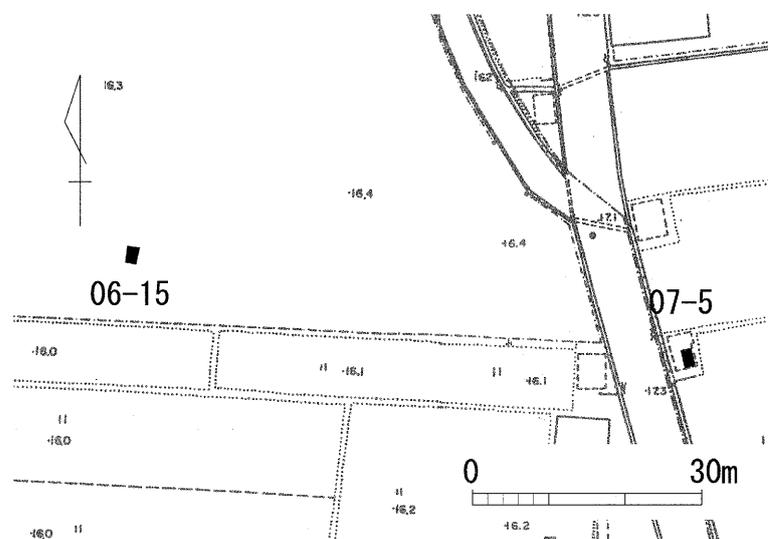
10 は Pit 2 より出土した土師器小皿である。強いヨコナデにより口縁部を成形している。11 は Pit 3 より出土した瓦器碗である。口縁部のみヨコナデを施す。内面には口縁にまで横方向のミガキが加えられる。

## 第6節 07-5 区の調査

### 1. 位置 (第1、4図)

調査区は遺跡の南西部にあって、国道 26 号「幡代」交差点から約 200 m 北上した地点である。地形的には沖積段丘もしくは氾濫原に属するものと考えられる。昨年来、周辺での調査が相次いでおり、南約 100 m には 06-1 区、西約 100 m には 05-8 区、06-2 区、06-15 区が位置し、このうち 06-1 区<sup>®</sup>や 05-8 区<sup>®</sup>では弥生時代中期の遺物が多く出土している。

現況は今般の開発に伴い 0.5 m 程の盛土が施されている。トレンチは 1 ヲ所設定した。



第4図 男里遺跡 07-5 区・06-15 区地形図

### 2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 3、7)

盛土 (1 層、約 50 cm) を除去すると、暗灰色土 (2 層、約 30 cm)、淡灰褐色混じり暗橙色土 (3 層、約 15 cm)、淡暗褐色砂質土 (4 層、約 15 cm) の各層が水平堆積をみせる。第2、3層は現代耕作土および床土であり、第4層は旧耕作土である。同層には弥生土器と思しき遺物細片がわずかに含まれるが、取り上げ不能であり、詳細は不明である。

第5層は第4層以下の全面に広がるもので、にぶい黄褐色シルトを主とする自然堆積である。無遺

物層であるが、淡褐色のブロックや炭を含むことから地山とは認定できない。また下位には円礫を多く含んでおり、細分が可能である。直下には黄灰褐色礫混土の地山が広がる。現状では硬く締まるが、上面に起伏がみられることから、かつては不安定な地形であったものと考えられる。

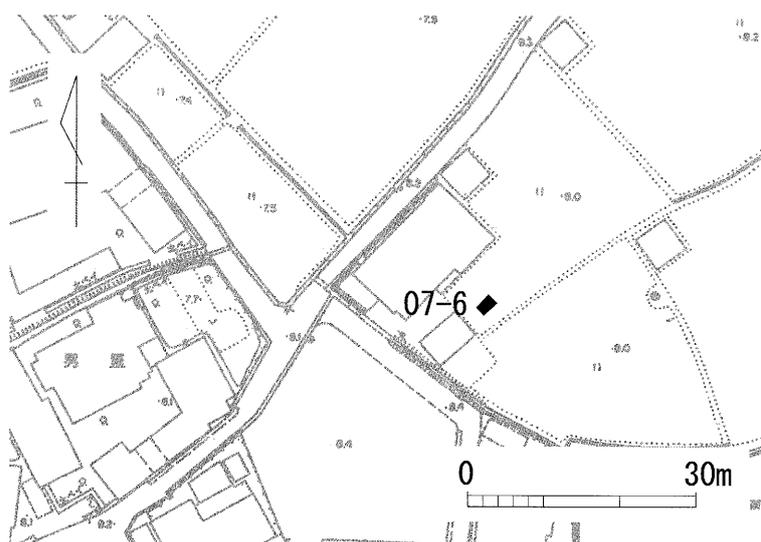
以上のうち、第4、5層および地山上面において精査を行ったが遺構は確認されなかった。遺物は4層にみられたほかはまったく出土しなかった。

## 第7節 07-6区の調査

### 1. 位置 (第1、5図)

調査区は遺跡の中央部北西寄りにおいて、双子池の北東約200mに位置する。現男里集落北東縁にあたり、調査区の北東にはいまだ多くの耕作地がみられる地点である。地形的には男里川旧河道もしくは氾濫原に属する。

近年、調査区北西側において集合住宅等の建設が進み、それらに伴う調査が実施されている。中でも北約10mに位置する96-5区<sup>®</sup>では中世の掘立柱建物を構成するピットが確認されている。



第5図 男里遺跡07-6区地形図

現況は更地であり、トレンチは1カ所設定した。

### 2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 3、7)

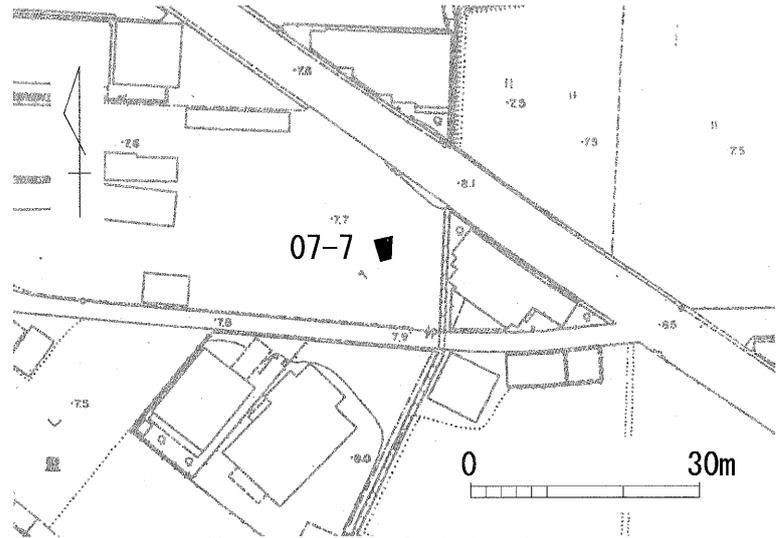
現代耕作土(1層、約15cm)を除去すると、トレンチのほぼ全域に焼土がみられ、以下はかなりの改変が予想された。基本的には焼土を掘り下げると旧耕作土と捉えられる黄白色礫混砂質土(2層、約10~30cm)が全面にみられ、さらに灰褐色礫混砂質土へと至る。同層は上面より50cm以上掘り下げても状況に変化が見られず、遺物もまったく含まないことから河川性堆積による地山と捉えることができるものである。

第1層直下で確認された焼土については、断面観察により旧耕作土上面より掘り込まれた土坑状の落ち込みとみられ、トレンチ北側へとさらに広がるものであった。落ち込み埋土には、焼土と共に近世以降の瓦を多く含み、また底部には炭の堆積がみられることから、不用品を焼却処分した廃棄土坑であると考えられる。

## 第8節 07-7区の調査

### 1. 位置 (第1、6図)

調査区は遺跡の北西縁部に位置し、府道堺阪南線「男里川」交差点から北西約100mの地点である。地形的には氾濫原および谷底低地に属する。周辺では比較的多くの調査が実施されているが、特に昨年度は3件の調査<sup>⑥</sup>が近接して行われた。これらの調査では、不安定な砂礫による地山を整地したうえで耕地化した可能性が指摘されており、出土遺物により中世以降の開墾によるものと考えられている。



第6図 男里遺跡07-7区地形図

現況は更地であり、トレンチは1ヵ所設定した。

### 2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 3、8)

基本的には盛土以下、灰黒色シルト (2層、約20cm)、灰褐色砂質土 (3層、約10cm)、黄灰褐色砂質土 (4層、約10cm)、淡褐色混じり灰褐色砂質土 (5層、約20～30cm) と続く。第2層は現代耕作土、第3、4層は第2層に伴う床土、第5層は旧耕作土である。第5層は下位において多量の焼土ブロックや炭が混入しており (6層、約10～30cm)、遺構上部を破壊しつつ堆積したものと判断される。第6層直下にはにぶい灰黄褐色砂質シルト (7層) が広がる。同層は周辺において確認されている整地層と対応するものと考えられ、中世の遺物をわずかに含む。第7層上面において遺構が確認された。

### 3. 遺構 (PL. 3、8)

遺構は上部が削平されており、かつ部分的な検出であったため全容は明らかでない。検出時にはトレンチ内を斜行する溝状のプランとして認識されたが、最終的には有床式 (ロストル式) 平窯と窯出しに関連する土坑であると判断された。

窯は長軸をN-25°-Wへと向けるもので、側壁と床、ならびに分焰道が確認された。窯の南端は土坑によって切られ、さらに北端は第6層による削平を受けているため、焚口や奥壁の状況は不明である。現状では最大幅40cm、長さ60cm、側壁高10cmを測り、全体では長方形に近いプランを持つものと推測される。市内における同形態の平窯例を参考に、2本の床を供えたものとして復元すると全幅は約90cmとなる。床は隅丸長方形を呈し、幅15cm、検出長35cm、高さ15cmを測る。断面観察により、本来の高さは25cm程であったことが分かる。分焰道は幅20cmを測り、焰道部分において床面はおおむね平坦である。

構築に際してはベースとなる第7層を掘り込んだ後、底面全体にキメの細かい粘土を貼付けて床となし、床の上に粘土を積み上げ床を設けている。側壁にも同様に厚さ2～3cmの粘土を貼付けている。

牀の側面や側壁は明橙色を呈し、火熱によりかなり硬化している。牀内部や側壁外側、また床面については暗褐色を呈する。牀や側壁部分では確認されなかったが、埋土にはスサ入り焼土塊が多く含まれており、天井部の構造や焼成方法を知る手がかりとなる。

窯の埋土からはスサ入り焼土塊のほか、土師質真蛸壺や古墳時代の須恵器がわずかに出土しているが、いずれも細片であり詳細は不明である。

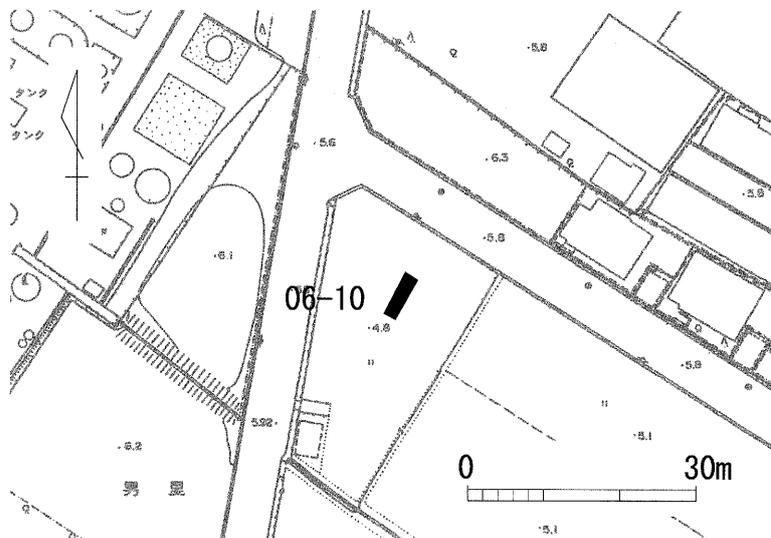
土坑は窯の南端に位置する。窯との平面的な切り合い関係は明確ではないが、断面観察によると牀の南方で貼床を切っていることから窯に後出する遺構であることが確実である。現状では窯とほぼ長軸を揃えた長方形を呈するが、南端部がトレンチ外へと伸びるため全容は不明である。長さ 1.1 m、幅 60 cm、深さ 5 cm を測る。埋土は 1 層であり、炭や焼土を多く含む。断面形状は浅い皿状を呈する。窯と切り合いを有すること、埋土に炭や焼土を多く含むことから、窯出しに伴う掻き出しによって形成されたものと考えられる。土坑からも遺物はほとんど出土しておらず、明確な時期や製品の決定には至らなかった。

## 第 9 節 06 - 10 区の調査

### 1. 位置 (第 1、7 図)

調査区は、遺跡の北東端、現在の男里集落の東側約 200 m に位置する。地形分類では氾濫原および谷底低地にあたる。

遺跡内でもあまり調査が行われていない地域ではあるが、周辺では南約 20 m において縄文時代後期から晩期の遺物が出土した流路<sup>®</sup>が確認されている。現況は更地で、トレンチは 1 ヲ所設定した。



第 7 図 男里遺跡 06-10 区地形図

### 2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 4、9)

盛土 (1 層、約 1 m) を除去すると、黒褐色シルト (2 層、約 20 cm)、黄褐色シルト (3 層、約 20 cm)、灰褐色シルト (4 層、約 20 cm) と続き、礫混灰色粗砂 (5 層) および黄灰色シルト (6 層) に至る。なお、第 4 層は、炭化木片を含む。掘削は第 5・6 層の上面までとした。

遺物は第 4 層から出土したのみで、遺構は第 4 層上面で精査を行ったが検出されなかった。

### 3. 遺物 (PL. 14、第 3 図)

12 は土師器の底部である。断面方形の高台を持つ。椀と思われるが、摩滅のため詳細は不明である。13 は土師器脚部である。台付皿と考えられる。「ハ」字状に開き、端部が肥厚する。やや黄味がかった

精良な白色の胎土を持つ。

## 第10節 06－11区の調査

### 1. 位置（第1、8図）

調査区は遺跡の北西部に位置し、現男里集落の北西縁より少し南に下がった地点である。地形的には自然堤防上に立地する。周辺では調査区の東約20mに位置する88-1区<sup>◎</sup>において室町期の土坑墓、約50mに位置する87-1区<sup>◎</sup>では河原石を充填した中世の土坑などが確認されている。現況は更地であり、トレンチは1ヵ所設定した。



第8図 男里遺跡 06-11区地形図

### 2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 4、9)

盛土以下、いずれも整地層と考えられる暗黄色土（2層、約15cm）および暗黄褐色礫混土（3層、約60cm）がみられる。さらに淡暗褐色砂質土（4層、約30cm）、淡暗褐色礫混土（6層、約10～30cm）、灰褐色混じり暗褐色砂質シルト（7層、約15cm）と続き、灰褐色砂礫へと至る。これらは概ね水平堆積を呈するが、トレンチ南端では第4層に淡灰褐色砂質シルトをはさむ箇所がある。確認された最下層である第8層は河川性堆積を呈しており、氾濫原に属するものと考えられるが、地山であるとの確証は得られなかった。

第4、6、7層より土師器や瓦器といった中世の遺物がわずかに出土している。第4層以下の各層で精査を行ったが、遺構は検出されなかった。

### 3. 遺物（PL. 14、第3図）

14は青磁椀である。直線的に開く体部に、下方が拡張され断面三角形を呈する口縁部がつく。口縁は強いヨコナデが施される。胎土は灰白色、釉色は透明感のある浅黄色を呈する。釉は薄く、全面に貫入がみられる。無文であるが、体部内外面共に白濁線がみられる。15は土師質真蛸壺の口縁部である。口縁内面にハケ状工具によるナデが施されている。

## 第11節 06－12区の調査

### 1. 位置（第1、2図）

調査区は07-1区、06-14区の南約10mに位置し、06-8区の南西部に接する。本調査区に近接した

地点では掘立柱建物を含む多くのピットや不定形の土坑などが確認されている。トレンチは1ヵ所設定した。

## 2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 4、9)

宅地造成に伴う盛土(1層、約1.4m)および旧表土(2層、約50cm)を除去すると、暗褐色礫混土が露呈する。同層は円礫を多く含み、かつ湧水があり、上面より約80cm掘削しても状況に変化はみられないことから河川性の自然堆積によるものと判断される。06-8区や近接する他の調査区では、ほぼ全面に安定したシルト層が地山として拡がっており、本調査区とは大きく状況が異なる。小規模な谷地形に含まれる可能性がある。

## 第12節 06-13区の調査

### 1. 位置 (第1、2図)

調査区は06-12区の東約4mに位置する。06-8区では北約2mの地点に多量の遺物が出土した方形土坑が存在する。トレンチは1ヵ所設定した。

### 2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 4、10)

宅地造成に伴う盛土(1層、約90cm)以下、暗灰褐色シルト(2層、約20cm)、暗灰褐色混じり淡暗褐色シルト(3層、約20cm)を経て、地山であるにぶい黄褐色シルトへと至る。第2層は現代耕作土、第3層は中世遺物包含層である。第3層はトレンチ東半部では削平され存在しない。地山上面において遺構が確認された。

### 3. 遺構 (PL. 4、10)

ピットが5基確認された。いずれもいびつな不整円形を呈し、径20~40cm、確認面よりの深さ20cmを測る。埋土はPit 3、4がにぶい黄褐色混じり淡褐灰色シルトであり、他は第3層であった。切り合い関係によりPit 3、4が時期的に古いものとなる。これらは06-8区におけるピット群と関連するものと考えられるが、現状では掘立柱建物等の復元には至っていない。Pit 2および4の埋土からわずかに遺物が出土している。

### 4. 遺物 (PL. 17、第3図)

16~18は土師器小皿、19は白磁皿、20~23は瓦器碗、小皿である。16、18、23はPit 4、19、22はPit 2から出土し、他は地山直上の第3層より出土したものである。

16は底部より外傾しつつ直線的に立ち上がり、口縁を外反させるもので、白色の精緻な胎土を持つ。17、18は底部より短く直線的に立ち上がり、口縁端部を丸く納めるものである。19は口縁端部を強く外反させるものである。胎土は薄い灰白色、やや緑がかった白色の釉色を呈する。全体に貫入がみられる。20は小皿である。緩やかに立ち上がる体部から短く直立する口縁を持つ。21~23は碗である。22、23の内面には横方向のミガキが加えられる。

## 第13節 06－14区の調査

### 1. 位置（第1、2図）

07-1区の西約2mに位置する。トレンチは1ヵ所設定した。

### 2. 層位と遺物の出土状況（PL. 4、10）

宅地造成に伴う盛土（1層、約1m）以下、ほぼ全域にわたって地山面に達する攪乱が存在する。90-10区として行われた事前試掘調査のトレンチ埋戻し土と考えられるもので、そのため元来の層序が確認できるのはトレンチ北端部のみである。盛土直下に暗灰褐色シルト（3層、約20cm）、淡褐色砂質シルト（4層、約20～40cm）を経て、にぶい黄褐色シルトの地山へと至る。第3層は現代耕作土、第4層は中世遺物包含層である。地山上面において遺構が確認された。

### 3. 遺構（PL. 4、10）

遺構はピットおよび溝が確認された。ピットはいずれも不整形もしくは楕円形を呈し、径10～40cm、確認面よりの深さ10cm程度の小規模なものが多い。埋土は第4層であり、一部に地山ブロックを含むものもある。溝（SD01）はトレンチのほぼ中央で確認された。長軸をE-10°-Nに向けた直線溝である。幅40cm、検出長1m、確認面よりの深さ20cmを測る。断面形状は逆台形を呈する。埋土は1層であり、第4層であった。わずかに土師器、瓦器の細片が出土しているが、図示し得ず、詳細は不明である。

## 第14節 06－15区の調査

### 1. 位置（第1、4図）

調査区は遺跡の南西部にあつて、05-8区<sup>①</sup>を伴う分譲地に含まれており、同区第1トレンチの北約5mに位置する。05-8区第1トレンチおよび西約10mに位置する第2トレンチでは多量の弥生土器や石器が出土し、トレンチ全体が溝状の遺構であると考えられるに至ったが、第2トレンチの北約5m、本調査区の西約10mに位置する06-2区<sup>②</sup>においては遺構はおろか遺物もまったく確認されていない。

### 2. 層位と遺物の出土状況（PL. 4、10）

盛土（1層、約1.5m）以下、灰黒色土（2層、約15cm）を介在し、さらに淡黄色礫混土（3層）、褐灰色礫混土（4層）へと至る。第2層は現代耕作土である。第3層および第4層は部分的に互層をなしており、遺物の出土しないことから河川性堆積による基盤層と考えられるものである。第3層上面において精査を行ったが、遺構は確認されなかった。

註 ① 大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・VI』（2002）

財団法人大阪府文化財センター『男里遺跡』（2005）

泉南市教育委員会「男里遺跡・II」『泉南市文化財年報No.1』（1995）

泉南市教育委員会「男里遺跡95-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書』（1996）など。

- ② 大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・VI』(2002)
- ③ 財団法人大阪府文化財センター『男里遺跡』(2005)
- ④ 大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・V』(2000)  
大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・VIII』(2004) など。
- ⑤ 泉南市教育委員会『男里遺跡発掘調査報告書』(2002)
- ⑥ 泉南市教育委員会「男里遺跡 96-1 区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XIV』(1997)  
財団法人大阪府文化財センター『男里遺跡』(2005) など。
- ⑦ ⑤と同じ。
- ⑧ 財団法人大阪府埋蔵文化財協会『男里遺跡』(1994)  
泉南市教育委員会「男里遺跡 95-2 区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書』(1996)
- ⑨ 泉南市教育委員会『戎畑遺跡発掘調査報告書』(2005)
- ⑩ 泉南市教育委員会「55-1 地区」『男里遺跡発掘調査報告書II』(1981)
- ⑪ 2006 年度、本市教育委員会による発掘調査。現在整理中。
- ⑫ ③と同じ。
- ⑬ 泉南市教育委員会「幡代遺跡 03-3 区の調査」『新伝寺遺跡 91-1 区・幡代遺跡 03-3 区発掘調査報告書』(2004)  
泉南市教育委員会『戎畑遺跡発掘調査報告書』(2005)
- ⑭ 泉南市教育委員会「男里遺跡 06-1 区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書X XIV』(2007)
- ⑮ 泉南市教育委員会「男里遺跡 05-8 区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書X XIV』(2007)
- ⑯ 泉南市教育委員会「男里遺跡 96-5 区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XIV』(1997)
- ⑰ 泉南市教育委員会「男里遺跡 06-4、5、6 区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書X XIV』(2007)
- ⑱ 泉南市教育委員会「男里遺跡 99-9 区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書X VIII』(2001)
- ⑲ ②と同じ。
- ⑳ 泉南市教育委員会「男里遺跡第 1 区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書V』(1988)
- ㉑ ⑮と同じ。
- ㉒ ⑭と同じ。

### 第3章 光平寺跡の調査

#### 第1節 既往の調査 (PL. 1、2、17、第9図)

光平寺跡は市域平野部の北西端、現男里集落の南西部に位置する現在の光平寺境内を中心とする南北200m、東西160mが遺跡範囲、すなわち寺域として推定されている。地形的には男里川支流である金熊寺川と菟砥川との合流地点右岸に形成された自然堤防上に立地する。

光平寺跡における調査の嚆矢は、1978年度、大阪府教育委員会によって現在の光平寺境内の北西隣接地、今年度調査区から南西に約100mの地点において行われた<sup>①</sup>。残念ながら調査の詳細は不明であるが、瓦類を中心として多量の遺物が出土している。そのごく一部については『泉南市史』などでも紹介されており<sup>②</sup>、光平寺跡の創建が平安時代末から鎌倉時代におかれる論拠となっている。しかしながら他にも光平寺跡を理解するうえで重要と思われる軒瓦が多く出土していることから、以下にこれまで未公表であったそれらの資料を紹介することとしたい。なお、これらの軒瓦は同調査における代表的なものを抽出したものであり、また平、丸瓦については今回は検討の対象とはしていない。

24は単弁八葉蓮華文軒丸瓦である。幅広で宝珠形を呈する蓮弁に横長の間弁が伴う。間弁はT字形と呼べるほど横に長い。中房は凹型に窪んでおり、1+8の蓮子を配する。中房周囲には細かな雄蕊帯が巡る。弁区周囲に圏線が巡る。丸瓦接合の後、凹凸面ともに縦位のナデを施す。

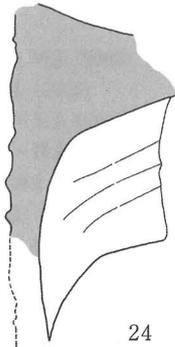
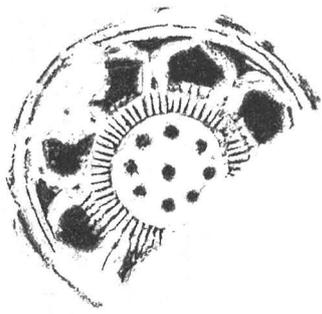
25は複弁蓮華文軒丸瓦である。瓦当の3/4および外縁部を欠く。蓮弁は珠文帯と雄蕊帯によって限られ短く、小さい。間弁の表現は鮮明でない。雄蕊帯は蓮弁に比べて太く、長い。中房には1+5の蓮子を配する。外区には小振りの珠文を疎に配する。瓦当裏面には斜め方向のナデが施される。

26は梵字文軒丸瓦である。細い圏線によって画された内区一杯に大日如来の種子である梵字「ア」を配する。梵字は細部まで精細に表現されており、梵字部分には木目の痕跡が顕著にみられる。丸瓦は上端より少し下がったところに接合され、凸面には縦位のケズリが施されている。瓦当に対し、丸瓦が逆さまに接合されており、製作にあたった工人は文様本来の意味を理解していなかったものと推測される。二次焼成を受けており、瓦当裏面にはススが多く付着している。同文の軒丸瓦が四天王寺に知られる<sup>③</sup>。

27は仏像文軒丸瓦である。『泉南市史』に掲載されているものである。内区に二重円光背の独尊を配する。衣文は通肩である。摩滅のため、尊顔は鮮明ではないが、眉間には白毫かと思われる突起がある。頂髻相は頭光に接し、頭光は外縁に接するため、全体は表現されていなかったものとみえる。外縁部は無文である。丸瓦は上端より少し低く差し込まれ、凸面は縦位のナデ、凹面は横位のナデが施される。

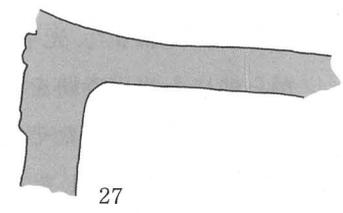
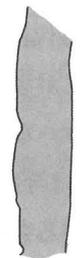
28は巴文軒丸瓦である。細い圏線によって画された内区に肉厚の左巻三巴を配する。頭部は瓦当中心に向かってやや屈曲し鍵型を呈するもので、瓦当の中心には小さな珠点がおかれる。長い尾部が大きくまわるが、圏線には接しない。外区には小振りの珠文が密に巡る。外縁は低く幅広である。丸瓦はやや低い位置に差し込まれ、凸面は縦位のケズリが、瓦当裏面は不定方向のケズリが施される。

29は巴文軒丸瓦である。右巻二巴を配するもので、尾部が圏線に接続する。外区には珠文を密に巡らす、珠文は範ズレによりいびつとなっている。丸瓦はやや低い位置に深く差し込まれ、凸面には縦位のケズリが施される。



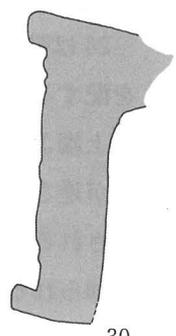
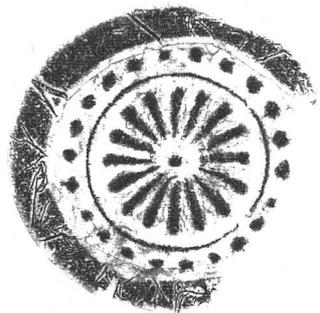
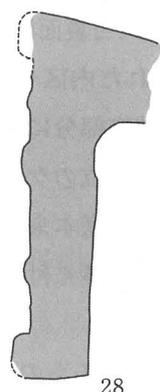
24

25



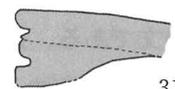
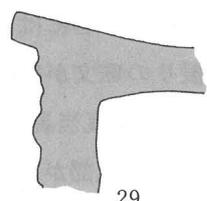
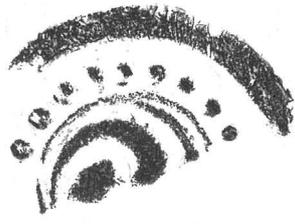
26

27



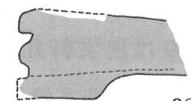
28

30



29

31



32

第9図 光平寺跡 1978年度調査出土の軒瓦

30は細弁蓮華文軒丸瓦である。太い圈線によって画された内区に16弁の蓮華文を配する。中房は無文で珠文よりも径が小さい。各連弁は中房にはわずかに接しない。弁端は丸くおさめられる。圈線の周囲には珠文が密に巡る。丸瓦は低い位置に接合されるが、接合に際して瓦当と丸瓦の中心がずれており、結果的にひずんだ状態となっている。

31、32は連珠文軒平瓦である。31は珠文の間に突線による「×」を配し、珠文を画する。瓦当は貼り付け技法により、顎下面は横位のナデ、平瓦凸面は縦位のナデが施される。瓦当裏面は緩やかに内湾する。瓦当面や平瓦凹面に離れ砂が顕著にみられる。32は珠文の間に直線文をおき、珠文を画する。瓦当は貼り付け技法により、顎下面は横位のナデ、平瓦凸面は縦位のケズリが施される。瓦当裏面は緩やかな曲線を描くが、幾分直線的である。瓦当面や平瓦凹面に離れ砂が顕著にみられる。

以上の軒瓦は、12世紀後半(24～26)、13世紀前半(27、28)、13世紀後半(30、31、32)、14世紀(29)と位置づけられる。これらの年代観によると、光平寺は12世紀後半に創建された後、13世紀から14世紀にかけて維持されていたということが可能である。今回は掲載しなかったが、同時に15世紀代の瓦質土器が多く出土していることから、15世紀以降に何らかの理由で伽藍縮小の動きがあったものと推測することも可能である。その際、共に不用品が廃棄されたのではないだろうか。

上記の調査以降、遺跡南西部を中心に数次の調査が本市教育委員会により実施されている。今年度調査区の南西約70mに位置する93-2区<sup>④</sup>では瓦窯の可能性も指摘される土坑が確認され、今回掲載したものと別形式の梵字文軒丸瓦や巴文軒丸瓦が出土している。

## 第2節 07-1区の調査

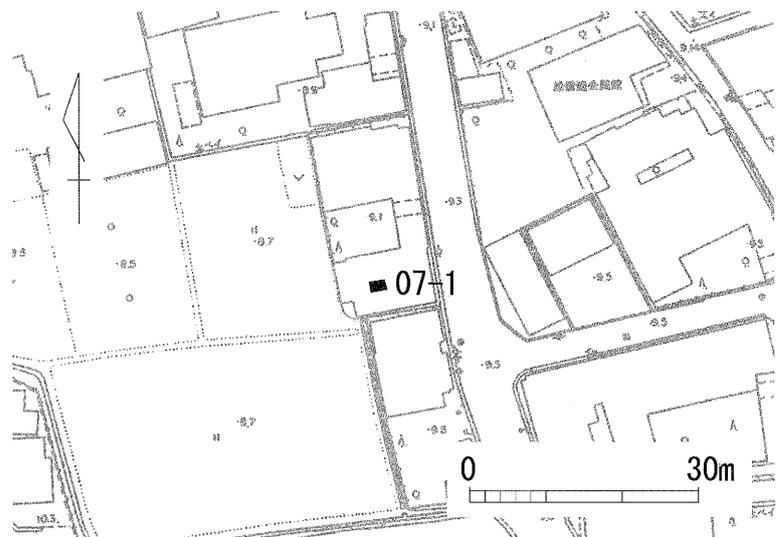
### 1. 位置(第1、10図)

調査区は光平寺跡の東縁部にあって、府道堺阪南線「男里」交差点を約80m南下した地点である。現男里集落の南東部にあたり、現在の光平寺境内より東へ約60mに位置する。地形的には男里川右岸の自然堤防上に立地する。

現況は更地であり、トレンチは1カ所設定した。

### 2. 層位と遺物の出土状況(PL. 4、11)

約30cmの盛土を除去すると、そこから50cmの間に複数の耕作土および整地層が確認される。直接の出土遺物が無いものの、以下の状況から近世以降の土地利用を示すものと考えられる。最下部の耕作土直下には整地層と考えられる淡褐色砂質土(10層、約10～30cm)が北から南へと大きく厚みを増しながら堆積している。同層には中世と思しき遺物をわずかに含む。第11層および12層はいずれ



第10図 光平寺跡07-1区地形図

も人頭大の焼けた円礫を多量に含み、さらに瓦類を中心とする遺物を多量に含むことから、人為的な堆積であることが明らかである。続いて暗淡黄褐色砂質土（13層、約30cm）を経て、地山である暗褐色砂礫へといたる。第13層は土師器細片をわずかに含む。また地山の状況から調査区は微小な谷地形に含まれているものと考えられる。

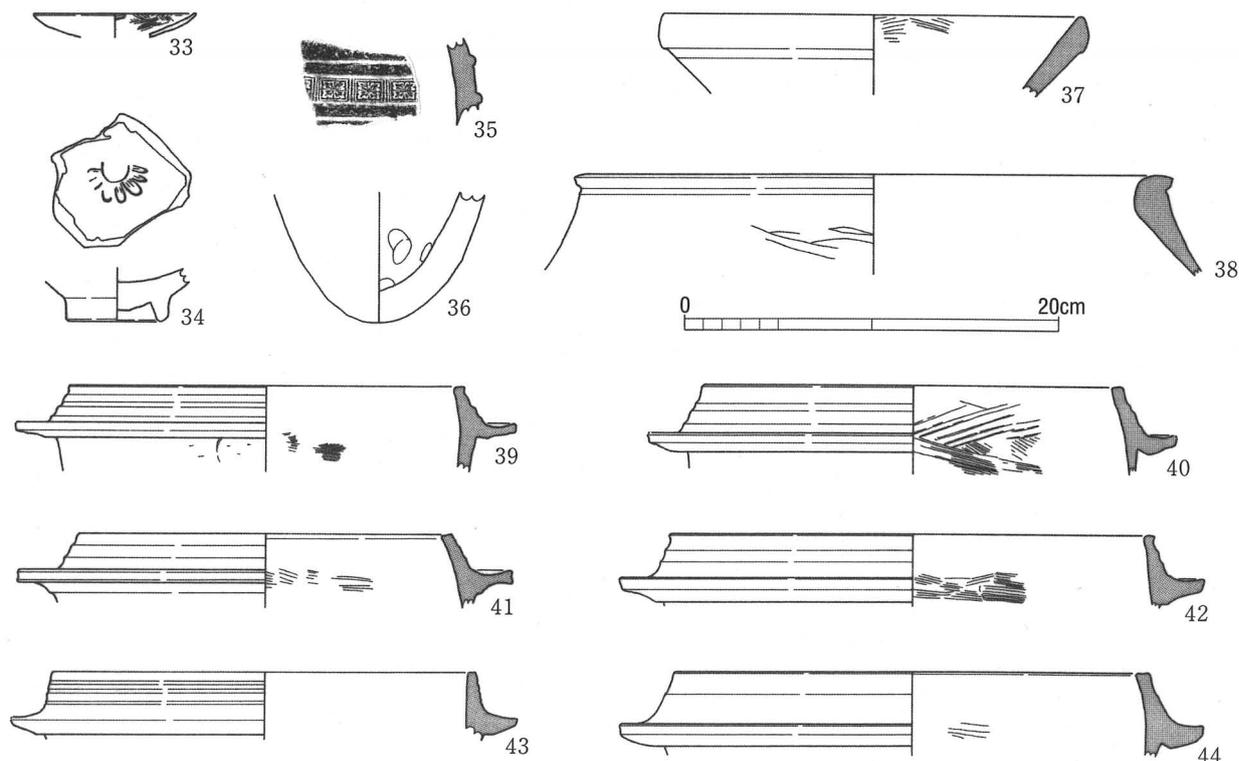
### 3. 遺構 (PL. 4、11)

先に述べたように第11層、12層には焼けた円礫や遺物が多量に含まれていた。断面観察によれば、第11、12層のベースとなる第13層が北から南へと直線的に傾斜し、さらに第12層が部分的に地山に達することから、第13層を掘り込んだ遺構と考えるのが妥当である。遺物の出土状況から廃棄土坑と捉えることが可能である。第11、12層からは最終的にコンテナ5箱分の遺物が出土した。

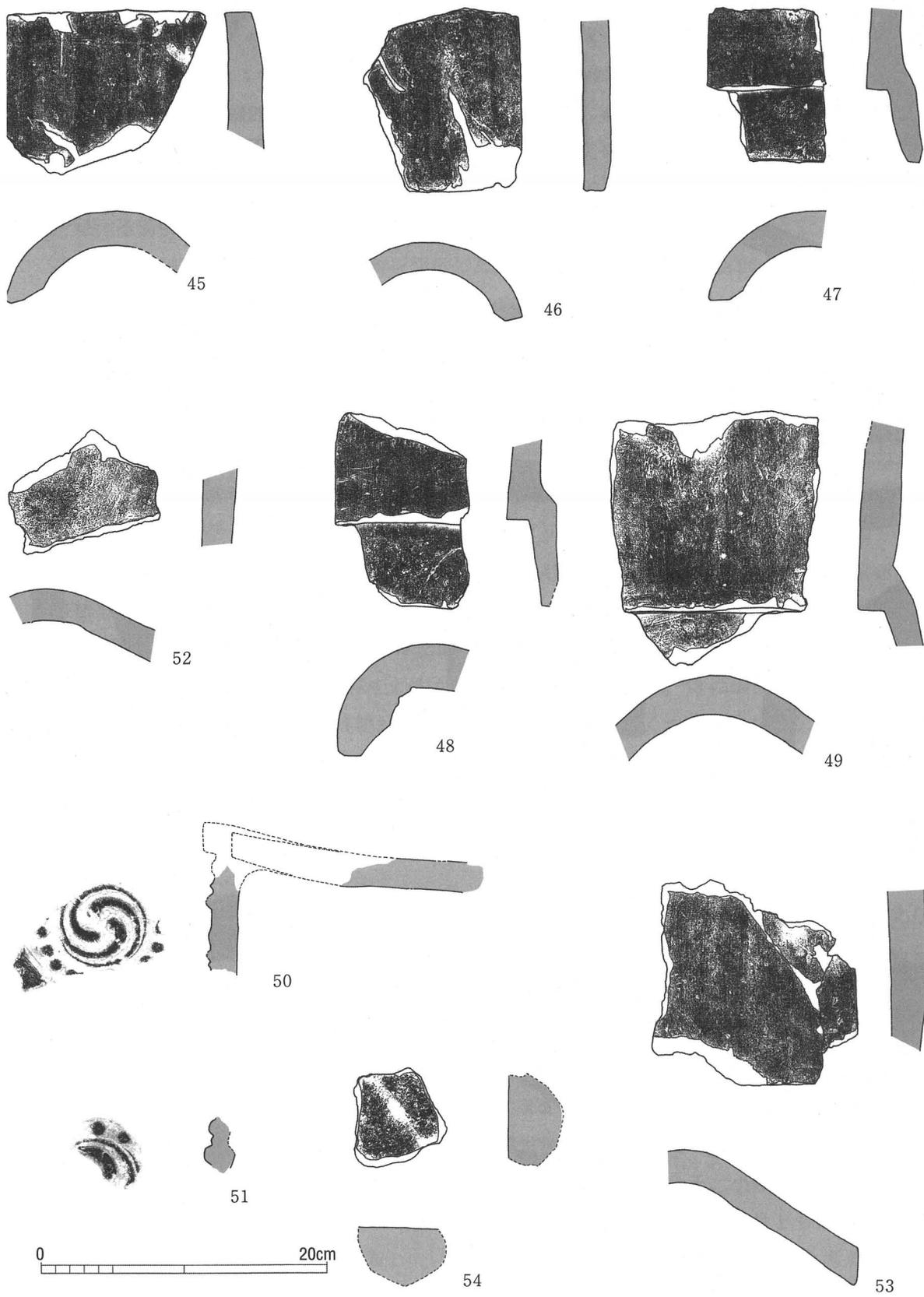
### 4. 遺物 (PL. 13～16、第11～13図)

図示した遺物はすべて第11、12層から出土したものである。瓦類のほか、土師器、青磁、瓦質土器、土師質真蛸壺などがある。

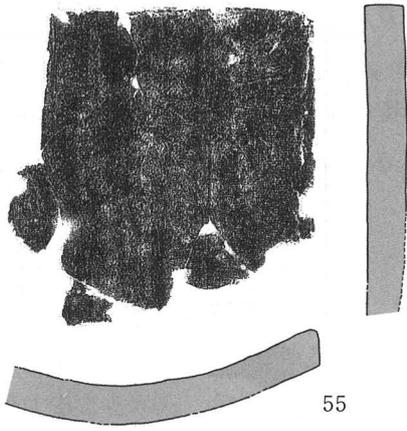
33は土師器皿である。底部を欠くが、体部内面にハケ目が施される。口縁の一部に煤が付着しており、灯明皿として用いられた可能性がある。34は青磁碗である。釉色はオリーブ灰色を呈し、高台内のみ露胎となり、露胎部との境が暗赤褐色を呈する。見込みにはへら描きによる蓮華文がみられる。35は瓦質土器である。2条の凸帯の間に界線で囲まれた花菱文をスタンプする。全形は不明であるが、平面円形の浅鉢となろうか。37は瓦質土器、播鉢である。外傾する口縁外面の下部を強くヨコナデし、端部がわずかに突起するものである。口縁内面には横方向のスリ目が認められる。38は瓦質土器、甕



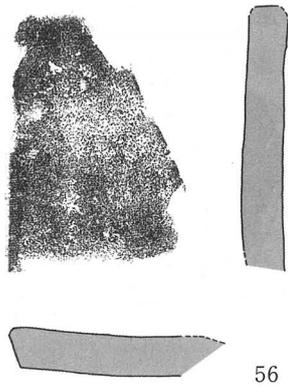
第11図 光平寺跡 07-1 区出土遺物①



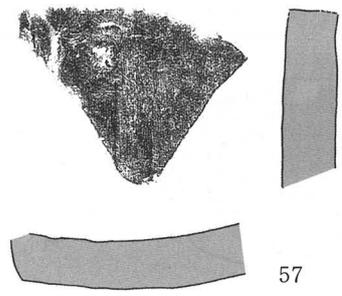
第 12 图 光平寺跡 07-1 区出土遺物②



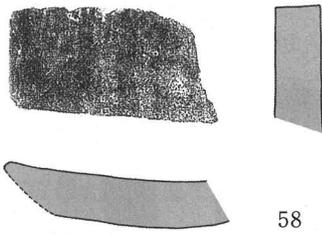
55



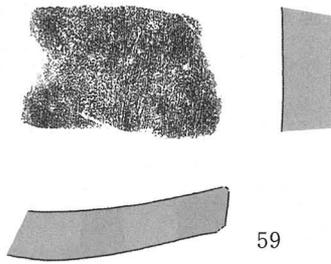
56



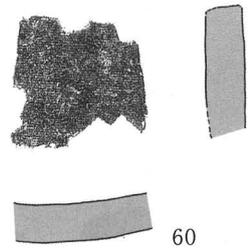
57



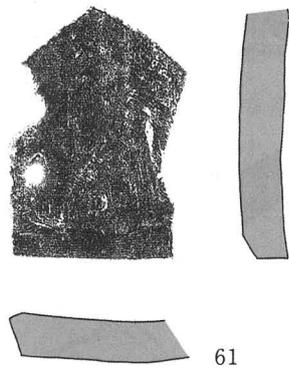
58



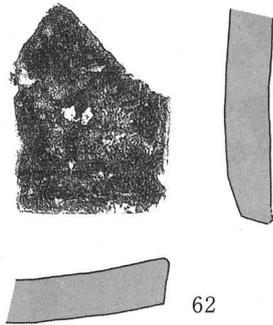
59



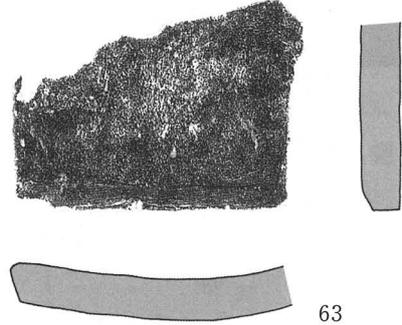
60



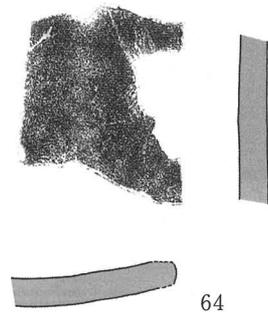
61



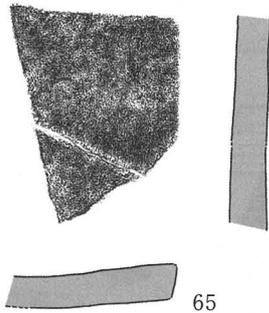
62



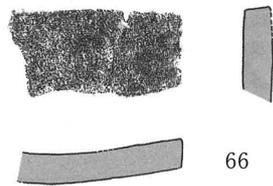
63



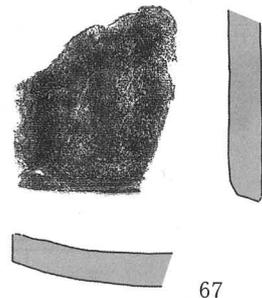
64



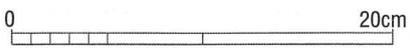
65



66



67



である。体部外面にはタタキ調整がなされ、玉縁口縁を呈する。36は土師質真蛸壺である。砲弾型を呈する製品の底部であり、内面には指頭圧痕が顕著に残る。39～44は瓦質羽釜である。在地品（39～42）と搬入品（43、44）がある。在地品には口縁部が内傾するもの（39～41）と直線的に立ち上がるもの（42）があり、いずれも幅の狭い鑿が付く。40は口縁部内面と胴部内面とでハケ目の大きさが顕著に異なる。39の胴部外面には横位のケズリが施される。43は暗褐色の胎土を持ち、河内産と考えられるものである。直立縁であり、口縁外面には3条の段を巡らす。肩部には幅狭の鑿が付く。44は内傾気味の口縁部、肥厚した幅狭の鑿を持つもので、口縁外面には1段以上の段が巡る。胎土は暗褐色を呈する箇所とクサリレキを多く含み、黄褐色を呈する箇所がある。

第12図には軒丸瓦、丸瓦、雁振瓦、塼を図示した。50、51は軒丸瓦である。50は右巻三巴文を配する。巴尾は長く、互いに接して圏線をなす。大振りの珠文が巡る。瓦当面には離れ砂が付着する。丸瓦は高い位置に差し込まれ、補足粘土は少ない。凹面には布目と糸切痕が顕著に認められる。51は右巻巴文である。巴尾が互いに接し圏線をなす。50に比べて珠文は疎である。軟質の製品である。45、46は行基式の丸瓦である。45は広端部、46は狭端部である。45は凹面広端縁、側端の順に面取りした後、凸面側の縁辺部を丸くナデ調整する。凸面は縦位のナデ調整が全面に施され、凹面胴部には糸切痕および布目が顕著に認められる。46は凹面狭端縁、側端の順に面取りした後、凹凸両面の縁辺部、さらに狭端凹面側を丸くナデ調整する。凸面は縦位のケズリ調整、凹面には糸切痕および布目が顕著に認められる。45、46ともに焼成は堅緻で瓦質を呈する。47～49は丸瓦玉縁部である。47、48は基本的な技法を共通するもので、凹面は胴部から玉縁部の側面、玉縁部端面を面取りするほかは無調整である。凸面の調整に若干の相違がみられ、47は凸面を丁寧な横位のナデ調整によって仕上げ、縄タタキの痕跡はほとんど残さない。凸面側端縁をわずかに丸くナデ調整を行う。48は胴部凸面を縦位のナデ調整によって仕上げるが、縄タタキの痕跡が多く残る。凸面側端縁は強くナデ調整を行う。いずれも硬質で、47は瓦質、48は須恵質の製品。49は胴部凸面を基本的には縦位のナデ調整によって仕上げるが、縄タタキの痕跡がわずかに残るほか、布目が顕著に認められる。凹面は縦位のナデ調整により糸切痕がわずかに残る程度である。玉縁部連結部には指頭圧痕が認められる。胎土に黒色砂粒を多く含み、厚みも約2.4cmとかなり分厚い。

52、53は雁振瓦である。共に横断面が「く」字形を呈するもので、同一形態をとるものと考えられる。52は最頂部から鱗部にかけてが残る。凸面は横位のナデ調整が施され、部分的に離れ砂が認められる。凹面は糸切痕、布目が認められるが、鱗部ではナデ調整により完全に消されている。53は最頂部から側縁までが残る。鱗部は直線的に開き、端部は垂直に面取りされる。凸面は縦位のナデ調整が施されるが、鱗部には部分的に布目が残る。凹面では逆に最頂部のみ未調整で、鱗部は縦位のナデが全面に施され、狭端の玉縁部との連結部分は丸く丁寧なナデが施されている。焼成は堅緻であるが、鱗部と頂部の間に明瞭な焼成の差異が認められ、その境界は側縁と平行な直線状をなす。鱗部は淡黄褐色であるのに対し、頂部において灰白色を呈し、瓦質に近い。54は塼である。小破片であり、全体に摩滅しているため詳細は明らかでないが、一面を平滑に仕上げ、滑り止めの刻み目ともとれる凹線がわずかに認められる。破断面にも煤が付着していることから、破碎後に火を受けたものと考えられる。

第13図には平瓦を図示した。厚手で硬質の製品（1類、55～63）、薄手で軟質の製品（2類、64～67）の大きく2類に分けることが可能である。1類は厚さ2.0cm以上を測り、須恵質を呈するものが

多く、瓦質でもかなり硬質な製品である。基本的に凹凸両面に離れ砂が顕著に付着する。55～58、60は広端部である。55、57、60の凹面は縦位のナデ調整が施されるが、部分的に布目が残るものである。55と57は凹面側縁端が突起する。凸型台を用いたものと考えられる。56、58は凹面の広端縁から幅3cm程と側端縁を丁寧にナデ調整する。59は凸面にタタキ痕がわずかに認められる。61～63は狭端部である。いずれも凹面側を面取りし、ナデ調整を行う。面取り幅は順に1.6cm、2.2cm、1.3cmと62が幾分幅広い。61、63は凹面側端縁をナデにより丸く仕上げるが、62では幅狭の面取りを施す。

2類は厚さ1.5～1.8cmを測る瓦質の製品である。いずれも凹凸両面に離れ砂が顕著に付着し、凹面側端縁をナデにより丸く仕上げる。64は凸面側端縁がわずかに突起しており、凹型台の痕跡とも考えられる。66は破断面を含む全面に煤が付着している。67は凹面狭端縁を0.9cm幅で面取りを行う。

以上、今回出土した遺物は土器類が概ね15世紀代、瓦類は平瓦2類が時期的に下る可能性があるものの、概ね13世紀～14世紀代に属するものと考えられる。

- 註 ① 調査は民間宅地開発に伴い1978年11月に実施された。コンテナ約80箱分の出土遺物がある。  
② 堀田啓一「考古編」『泉南市史 資料編』泉南市（1982）  
③ 四天王寺文化財管理室編『四天王寺古瓦聚成』柏書房（1986）  
④ 泉南市教育委員会「光平寺跡93-2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XII』（1995）

## 第4章 長山遺跡の調査

### 第1節 既往の調査 (PL. 1、2)

長山遺跡は市域平野部の中央西寄りにあって、洪積段丘縁辺部に沿って伸びる長山丘陵の西麓に位置する。地形的には遺跡南東部を丘陵が占め、西半を沖積段丘、北東部は中位段丘となる。このうち段丘については、現馬場集落の北東に隣接する耕作地として利用されている。これまでに数件の調査<sup>①</sup>が丘陵先端部の西側に集中して行われ、鋤溝などの耕作関連遺構が確認されている。時期的には明確ではないが、中世以降の開発を示唆するものと考えられている。

### 第2節 07-1 区の調査

#### 1. 位置 (第1、14 図)

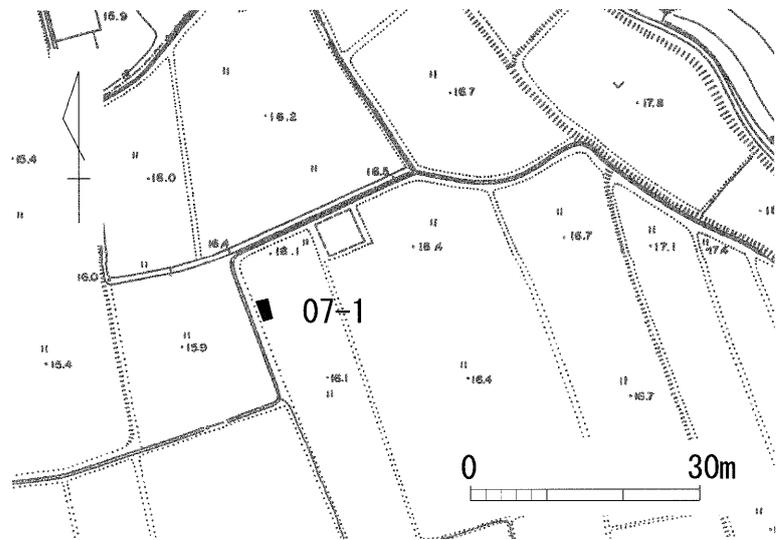
調査区は遺跡の中央部北寄りに位置する。元来は現馬場集落に隣接する耕作地に含まれるが、近年住宅地としての開発が進んだ地点である。地形的には沖積段丘上に立地する。

現況は更地であり、トレンチは1カ所設定した。

#### 2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 5、11)

盛土 (1層、約1.6 m) を除去すると淡暗灰褐色砂質シルト (2層、約5～20 cm)、橙色混じり明灰白色砂質土 (3層、約10 cm)、黄灰色砂質シルト (4層、約15 cm) の各層が水平堆積を呈し、続いて淡灰褐色混じり暗褐色砂質シルト (5層、約20 cm) へと至る。以下は部分的な確認であるが、第5層直下に地山である淡黄褐色シルトが拡がる。

これらのうち、第2層は現代耕作土、第3、4層は床土、第5層は旧耕作土と考えられる。いずれも細片ながら、第4層には瓦質土器、第5層には土師器、黒色土器を僅かに含む。第5層上面において精査を行ったが、遺構は確認されなかった。



第14図 長山遺跡 07-1 区地形図

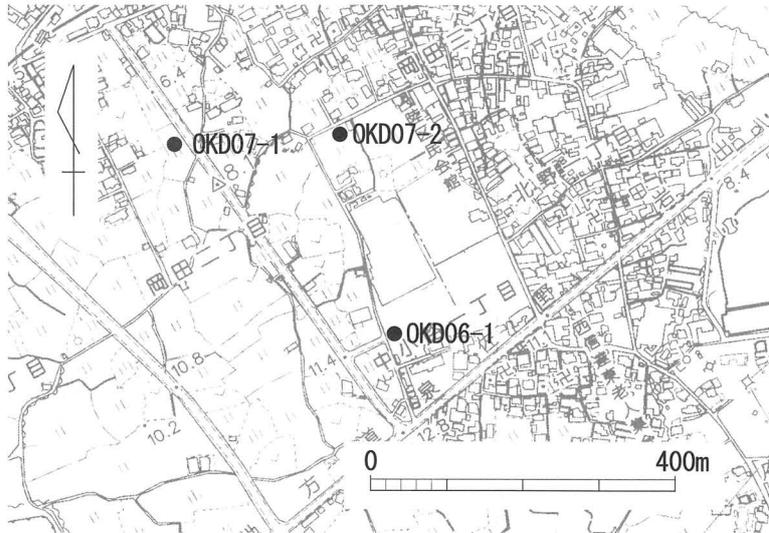
註 ① 泉南市教育委員会「長山遺跡の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XII』(1995)  
泉南市教育委員会「長山遺跡 96-1 区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XV』(1998)  
泉南市教育委員会「長山遺跡 98-1 区の調査」『男里遺跡発掘調査報告書XVI』(1999)

## 第5章 岡田遺跡の調査

### 第1節 既往の調査 (PL. 1、2)

岡田遺跡は市域平野部の北東部にあって、現岡田集落の南西側に位置する。遺跡東半部が宅地や工場地であり、西半は耕作地として利用されている。地形的には低位段丘の北東隅にあたり、遺跡の北縁に氾濫原や砂丘を含む。

遺跡中央部において凹基式石鏃や古代の須恵器<sup>①</sup>が散見されるが、実態は不明である。北東部を中心として中世の遺構、遺物<sup>②</sup>が確認されており、周辺に集落の存在が確実視される。かえって遺跡の南東部においては耕地境界の落ち<sup>③</sup>や灌漑用井戸<sup>④</sup>などが確認されており、中世以降、現代までの土地利用に大きな変化が無かったことを示す。



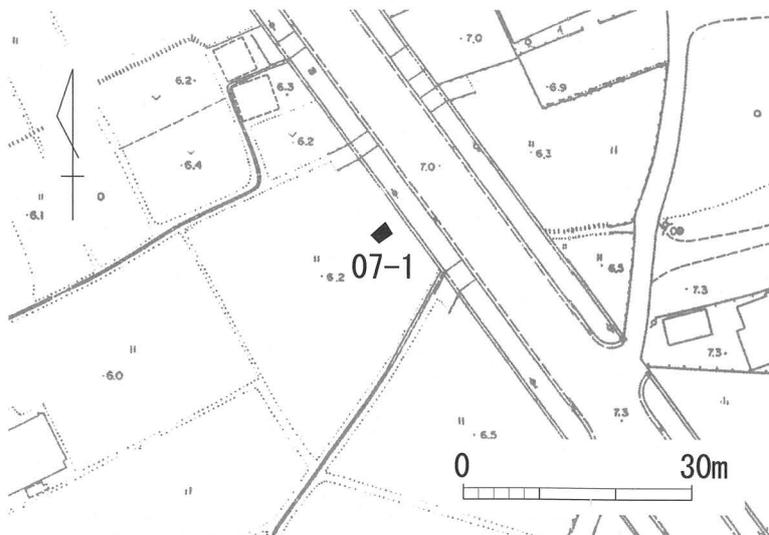
第15図 岡田遺跡調査区位置図

### 第2節 07-1区の調査

#### 1. 位置 (第15、16図)

調査区は遺跡の北西部にあって、遺跡西半を南北に縦断する市道中小路岡田線に西面している。周辺は岡田集落南西に広がる耕作地に含まれるが、近年市道沿いを中心とした個人住宅等の建設が進んでいる。地形的には低位段丘に立地する。

周辺では市道建設に伴う95-2区をはじめとして、比較的多くの調査が行われており、中世以降の流路<sup>⑤</sup>、近代の粘土採掘坑などが確認されている。現況は休耕地であり、トレンチは1ヵ所設定した。



第16図 岡田遺跡07-1区地形図

## 2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 5、11)

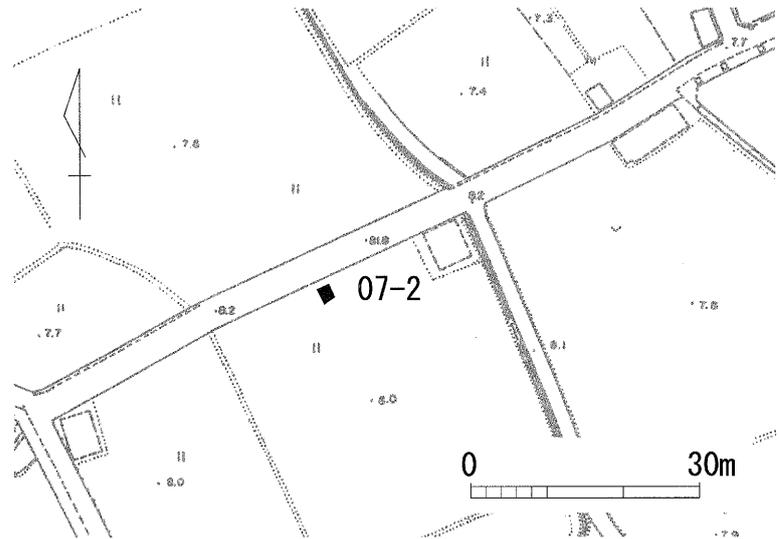
現代耕作土である灰黒色土（1層、約20cm）以下、暗灰褐色砂質土（2層、約20cm）が続き、地山である黄白色粘土へと至る。第2層は旧耕作土であり、下位に地山ブロックを多く含む。トレンチ東端部において、第2層と地山との攪拌層を埋土とする攪乱が認められた。地山土を多く含むことから粘土採掘に関連するものかも知れない。攪乱埋土より近世瓦が1点出土している。

### 第3節 07-2区の調査

#### 1. 位置 (第15、17図)

調査区は遺跡のほぼ中央にあって、現岡田集落の南西隅に位置する。調査区に北面する市道が現集落の南限となっており、調査区南方には耕作地が広がっている。地形的には低位段丘に属する。周辺では90-2区<sup>⑥</sup>、91-2区<sup>⑦</sup>において中世以前に遡りうる遺構、遺物が確認されている。

現況は更地であり、トレンチは1カ所設定した。



第17図 岡田遺跡07-2区地形図

#### 2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 5、12)

造成に伴う碎石による盛土（1層、約30cm）を除去すると淡黄白色粘土混じり褐色土（2層、約70～90cm）が現れる。部分的にケミコが残るなど、地盤改良に伴う盛土であると考えられるが、一見するとそれほど新しく形成されたようには見えない。地山ブロックを多く含む、またわずかに耕作土を含むことから、造成に際して耕作土を搬出し、さらに下層を部分的に攪拌したものと思われる。続いて暗褐色混じり黄白色粘土（3層、約20～40cm）を経て、地山である黄白色粘土へと至る。地山は部分的に硬く締まった暗褐色砂礫となるもので、通有の安定した粘土層とは状況が異なる。第3層が地山を攪拌したものと捉えられることから、粘土採掘によって上位にある安定した粘土層が採掘された結果、下位の荒い堆積が露呈したものと判断される。第3層はその埋め戻し層と考えるのが妥当であろう。

- 註 ① 泉南市教育委員会「岡田遺跡91-2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書IX』（1992）  
泉南市教育委員会「岡田遺跡90-3区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書IX』（1992）  
② 泉南市教育委員会「岡田遺跡「97-1、2区」の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XV』（1998）  
③ 泉南市教育委員会「岡田遺跡94-2、3、4区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XII』（1995）  
④ 泉南市教育委員会「岡田遺跡94-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XII』（1995）  
⑤ 泉南市教育委員会「岡田遺跡01-4区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XX』（2003）  
⑥ 泉南市教育委員会「岡田遺跡90-2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書IX』（1992）  
⑦ 泉南市教育委員会「岡田遺跡91-2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書IX』（1992）

## 第6章 大苗代遺跡の調査

### 第1節 既往の調査 (PL. 1、2)

大苗代遺跡は市域平野部の東部にあつて、現信達大苗代集落の北端に位置する。地形的には低位段丘の東端にあたる。既往の調査において遺構、遺物が発見されるのは今のところ遺跡の北縁部に限られている。本調査区の西に隣接する91-1区<sup>①</sup>では中世前半のピットや溝が、また南に隣接する98-1区<sup>②</sup>においても中世と考えられるピットが確認されており、共に周辺に当該期の集落が想定されている。

### 第2節 07-1区の調査

#### 1. 位置 (第18、19図)

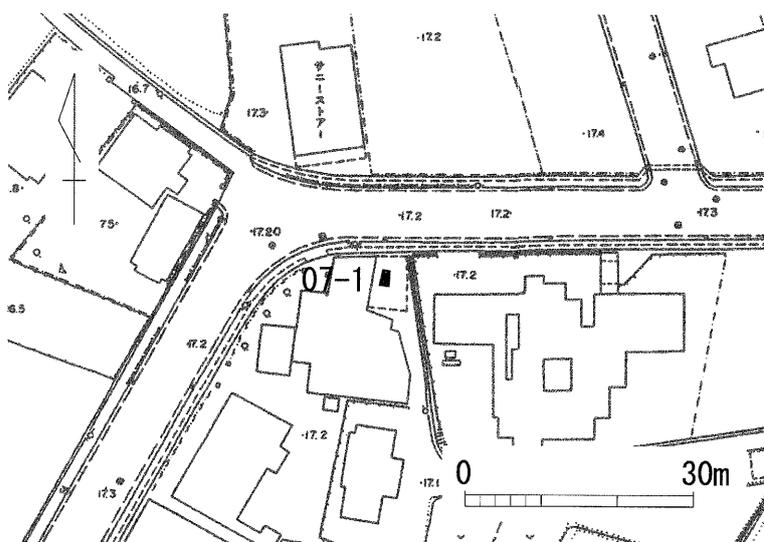
調査区は遺跡の北端部にあつて、現集落からは若干北西に外れた地点に位置する。地形的には低位段丘に属する。現況は更地であり、トレンチは1ヵ所設定した。

#### 2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 5、12)

盛土 (1層、約30～60cm) を除去すると、基本的には淡灰白色砂質土 (2層、約10cm)、淡灰褐色混じり暗黄褐色砂質シルト (3層、約10cm)、暗黄褐色混じり淡

灰褐色砂質土 (5層、約20cm)、灰褐色混じり暗黄褐色砂質シルト (6層、約10cm) が概ね水平堆積を呈する。第2、5層が耕作土、第3、6層がそれぞれ床土である。トレンチ北端部には第5層上面より切り込まれた耕作関連の遺構 (4層) が断面確認される。第6層に続いてマンガンの多く沈着した暗灰褐色混じり暗褐色シルト (7層、約10cm) が拡がり、続いて地山である暗橙色粘土へと至る。

断面観察ではあるが、トレンチ北端部において地山に掘り込まれた落ち込みが確認された。トレンチ北東隅に位置する最も大きなもので、深さ30cm、東西方向への長さ50cm、南北方向への長さ30cmを測り、断面形状は逆台形を呈する。埋土は基本的に暗褐色シルト1層であるが、底部に炭や拳大の礫を含む。遺物はわずかに土師器の細片がみられたのみであり、詳細は不明である。周辺状況から考えて中世に属する遺構である可能性が高い。



第18図 大苗代遺跡07-1区地形図

註 ① 泉南市教育委員会『大苗代遺跡発掘調査報告書』(2002)

② 泉南市教育委員会「大苗代遺跡98-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XVI』(1999)



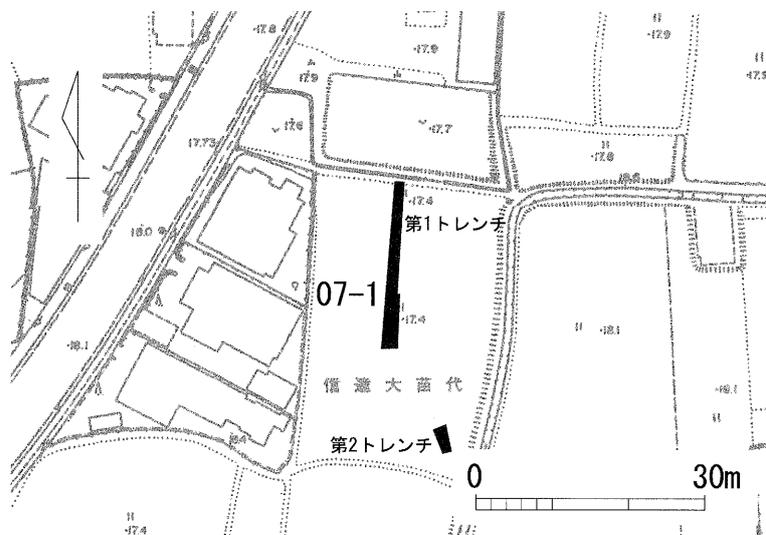
第 19 図 岡田西遺跡、大苗代遺跡、仏性寺跡、狐池遺跡調査区位置図

## 第7章 仏性寺跡の調査

### 第1節 既往の調査 (PL. 1、2)

仏性寺跡は市域平野部の東部に位置し、現信達大苗代集落の西に広がる耕作地をその範囲とする。地形的には平野部の大半を占める低位段丘上に立地している。

仏性寺跡は、建武3(1336)年淡輪重氏の軍忠状に「信達荘仏性寺」とみえ、その後根来寺支配下にあったことが永喜元(大永6・1526)年の信達荘納帳より推測される<sup>①</sup>。天正5(1577)年、織田信長の雑賀攻めに際し、焼き討ちされたとの伝承を持つが、詳細は明



第20図 仏性寺跡 07-1 区地形図

らかでない。しかしながら、こうした断片的な記録や伝承に加え、現在も遺跡中央部周辺には「ダイモン」や「ヤクシドウ」といった小字が残ることから、市内でも比較的早くから周知されてきた遺跡の一つである。

これまで遺跡中央部を東西に横断する市道赤井神社線の沿道を中心に数件の調査が行われているが、遺跡の内容究明には至っていない。遺跡中央に位置する 87-1 区では中世の庭園遺構の可能性のある石積や配石遺構が確認され、中世期の瓦が多く出土した<sup>②</sup>。遺跡西端にあたる 55-8 区では、中世前半と後半に該当する 2 面の遺構面が確認されている<sup>③</sup>。

### 第2節 07-1 区の調査

#### 1. 位置 (第19、20図)

調査区は遺跡の中央部北端に位置する。国道26号「市場北2番」交差点の北西約150mにあって、現信達大苗代集落の南東に広がる耕作地に含まれる。調査区の南約50mに87-1区が位置する。現況は盛土の施された更地であり、トレンチは建物本体および浄化槽部分に各1ヵ所設定した。以下、建物部を第1トレンチ、浄化槽部を第2トレンチとする。

#### 2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 5、12)

第1トレンチは調査区のほぼ中央に1.5m×18mの範囲で設定し、南端部において部分的にトレンチを拡張した。確認された層序は、基本的に盛土(1層、約90cm)以下、暗灰色砂質シルト(2層、約15～30cm)、灰褐色混じり黄褐色粘土(3層、約5～10cm)、褐色混じり暗灰褐色砂質シルト(4層、

10～20 cm)の各層が概ね水平堆積を呈する。第2層は現代耕作土、第3層は床土、第4層は旧耕作土である。第4層直下に地山である橙色礫混粘土が広がる。地山は非常に粘性が強く、仏性寺跡の北に位置する大苗代遺跡や北野遺跡における地山と共通するものと考えられる。

地山上面において遺構が確認された。トレンチ南端部において確認されたため、部分的にトレンチを拡張したところ、不定形のピットや溝状の小穴が10数基確認された。遺構はいずれも深さ10 cm程度と浅く、また平、断面が著しく不安定なこと、埋土が第4層であること、切込み面が特定できないことから、人為的な遺構とは考えがたいものであった。唯一、炭混じり淡褐色土を埋土に持つ小穴が確認されたが、その性格は不明である。

第2トレンチは調査区の南東端に設定した。盛土および耕作土以下、黄褐色粘土を挟んで黄灰色礫混粘土の地山へと至る。第1トレンチの状況とは異なり、安定した地山面は全く存在しないことが確認された。

- 註 ① 仲村 研「古代・中世」『泉南市史 通史編』泉南市(1987)  
② 泉南市教育委員会「仏性寺跡の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書V』(1988)  
③ 泉南市教育委員会「55-8地区」『男里遺跡発掘調査報告書』(1981)

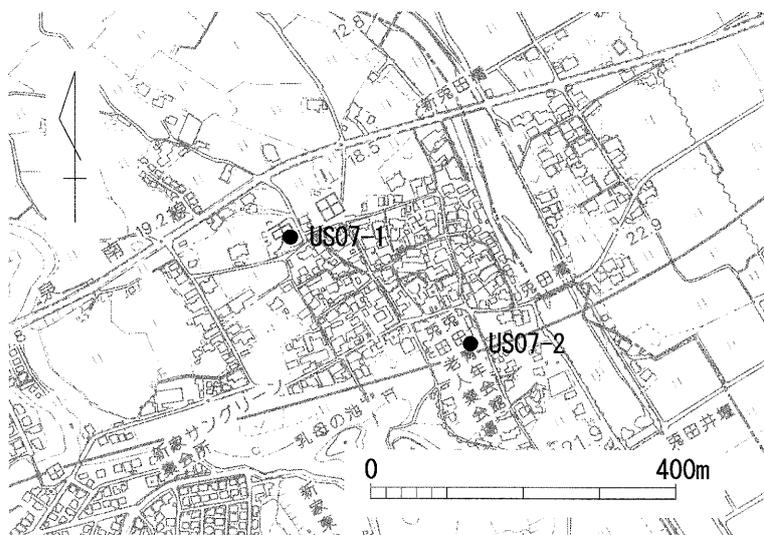
## 第8章 兔田遺跡の調査

### 第1節 既往の調査 (PL. 1、2)

兔田遺跡は市域平野部の南東隅に位置する。遺跡の中央から東に現兔田集落が展開し、東端は檜井川河道と接する。遺跡の西側は耕作地として利用されている。

地形的には檜井川左岸の沖積地に立地し、大半を沖積段丘が占めるが、遺跡の北東部に旧河道が、南西隅には新家古墳群の展開する丘陵を含む。

現集落内を中心として数次の調査が行われている。集落の初源を中世と考える遺物包含層のほか、わずかにピットなどの遺構<sup>①</sup>が確認されている。またほぼすべての地点において砂礫を基盤層とする結果が得られており、想像以上に旧河道もしくは氾濫原が広がり、安定した段丘面の存在は今のところ知られない。

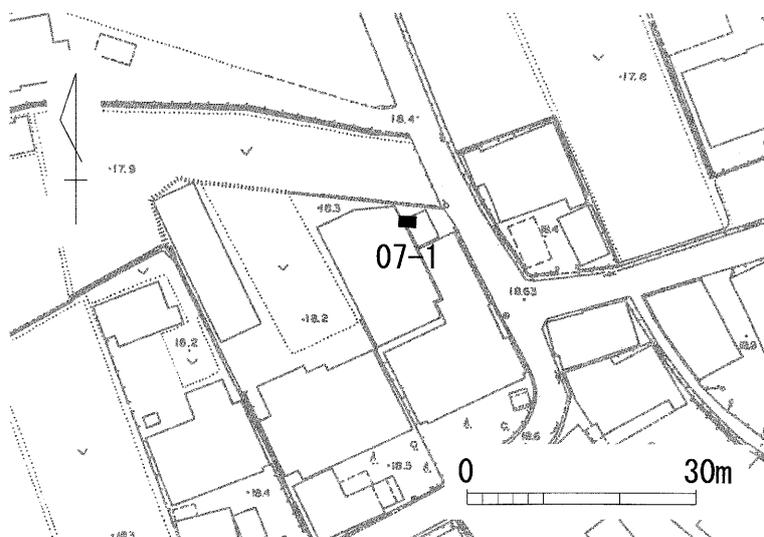


第21図 兔田遺跡調査区位置図

### 第2節 07-1区の調査

#### 1. 位置 (第21、22図)

調査区は遺跡の北部中央にあって、現兔田集落の北西隅に位置する。地形的には檜井川右岸の沖積段丘上に立地するものと考えられるが、既往の調査では安定したシルト面が確認された地点は皆無であり、ほぼ全ての地点で河川性堆積を示す砂礫が確認されている。周辺では北約100mに02-1区、南東約100mには96-1区が位置しており、96-1区では近世の溝<sup>②</sup>が確認されている。



第22図 兔田遺跡 07-1区地形図

## 2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 5、13)

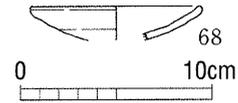
現代耕作土である淡暗灰褐色土（1層、約20cm）以下、淡灰褐色混じり暗橙色土（2層、約15cm）、灰褐色砂質土（3層、約15cm）、暗褐色混じり淡灰褐色砂質土（4層、約10～15cm）、淡灰褐色混じり淡褐色砂質土（5層、約15cm）

の各層が概ね水平堆積を呈する。これらはいずれも旧耕作土であり、うち第4、5層には中世の遺物をわずかに含む。

第5層以下、基本的には暗橙色砂質シルト（7層、約10cm）を介在して地山である暗灰褐色砂礫へと至る。第7層は自然堆積によるものと考えられ、遺物は含まない。トレンチの南西隅部において第7層上面に若干の窪みが存在し、そこには旧耕作土と考えられる褐色混じり灰褐色砂質土が堆積している。第4層以下、各層の上面で精査を行ったが遺構は確認されなかった。

## 3. 遺物 (PL. 14、第23図)

68は土師器小皿である。層位的に取り上げることができなかったが、第4、5層から出土したのと考えられる。大きく外傾する体部から、口縁端部はわずかに肥厚し、上方に立ち上がる。全面に丁寧なナデ調整が施されている。

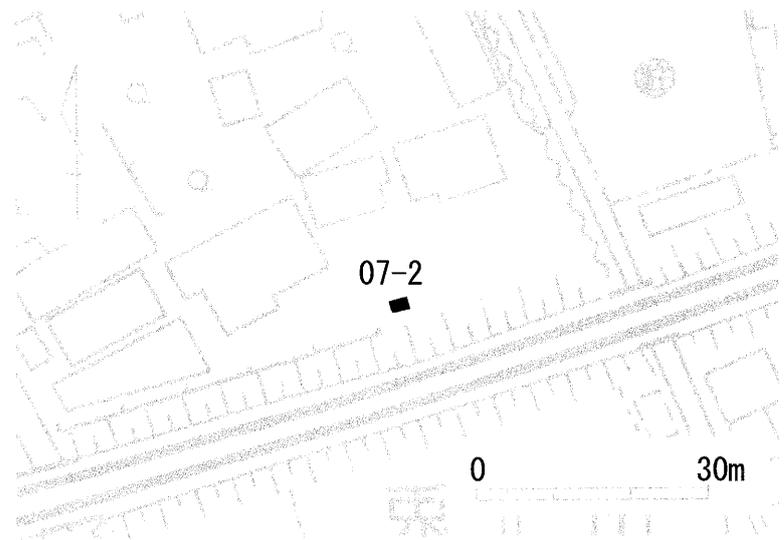


第23図 兎田遺跡07-1区出土遺物

## 第3節 07-2区の調査

### 1. 位置 (第21、24図)

調査区は遺跡の南東隅に位置し、現兎田集落の中央部南端にあたる。調査区南側の丘陵裾をJR阪和線が通り、東約100mには榎井川が位置する。地形的には榎井川左岸の沖積段丘に分類されるが、既往の調査によって想像以上に氾濫原もしくは旧河道が広がっていることが想定されている。現地形においても調査区は榎井川による開析谷に含まれているものと読みとることが可能である。



第24図 兎田遺跡07-2区位置図

現況は更地であり、トレンチは1ヵ所設定した。

### 2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 5、13)

盛土（1層、約50cm）を除去すると、淡灰黒色砂質シルト（2層、約15cm）および暗橙色混じり暗灰褐色砂質シルト（3層、約15cm）が概ね水平堆積をみせる。第2層は耕作土、第3層は床土である。

続いてにぶい黄褐色シルト（4層、約5～10 cm）が若干の起伏を伴いながら堆積している。自然堆積によるものと考えられるが、薄く軟弱な堆積であることから、面として機能することは困難であると判断される。第4層以下には暗灰褐色砂礫が拡がり、50 cm以上掘り下げても変化がみられないことから、河川性堆積の地山であると考えられる。

このうち第4層および地山上面において精査を行ったが遺構は確認されなかった。またいずれの層位からも遺物は出土しなかった。

註 ① 泉南市教育委員会「兎田遺跡 95-1、2 区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書 X III』（1996）

② 泉南市教育委員会「兎田遺跡 96-1 区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書 X V』（1998）

## 第9章 まとめ

本書では、平成19年1月1日より同12月31日までの間に、文化財保護法に基づく発掘届出等に基づいて行われた発掘調査および確認調査、ならびに昨年度未報告分を合わせた21件について報告している。以下にこれらの調査成果を概観し、今年度のまとめとしたい。

男里遺跡では今年度7件の調査が行われ、昨年度未報告の6件を含め13件の調査について報告している。遺跡南東部での調査が集中することとなった。大半は現在の馬場集落南端において実施されたもので、ここでは昨年度比較的規模の大きな民間宅地開発が行われ、開発に伴う本調査(06-8区)が実施された<sup>①</sup>。かつて同地点においては今般とは異なる開発計画に基づき事前確認調査(90-10区)が行われている<sup>②</sup>。90-10区では遺構検出ししか行っていないが、12世紀代の集落の存在が予想される結果が得られていた。06-8区では第2章でも述べたとおり13世紀～14世紀代の集落が展開することが明らかとなり、集落廃絶後に設けられた大規模な溝なども確認されている。一方、90-10区で予想された12世紀代の顕著な遺構は確認されなかった。

本書にて報告する一連の調査は06-8区の成果を受け、宅地造成後の個人住宅等の建設に伴い実施されたものである。06-8区の調査成果を補足するもののほか、新たな知見をも得ることができた。

07-1区および06-14区では東西に延びる直線溝が確認された。地山直上の遺物包含層を埋土とすることから06-8区の集落に伴うという確証は得られなかった。集落廃絶後の「流路」に接続するものである可能性もある。

07-3区では非常に部分的ながら東方向への落ち込みが確認された。位置関係より06-8区における「流路1」の西肩が確認されたものといえる。落ち込み底面より下層遺構が確認されたことにより、「流路」によって削平された前代の遺構が少なからず存在するものと考えられる。

07-4区、06-13区ではピットが確認され、06-8区の成果を補足することができた。06-13区ではピット間に明確な切り合い関係が認められたことにより、集落変遷の手がかりを得ることができた。

07-2区や06-12区では明確な遺構は確認されなかった。特に06-12区においては河川性堆積による砂礫が全面に拡がっており、安定したシルト面はまったく存在していなかった。周辺には想像以上に微小な旧地形が隠されているものと考えられる。そうした微地形が集落の構造にどのような影響を与えていたのか、興味を持たれるところである。一連の調査で出土した遺物は概ね13世紀代に属するものといえ、それを大きく前後するものは基本的にはみられない。集落の存続期間を示すものと捉えてよい。唯一07-3区からは12世紀代の東播系須恵器が出土している。90-10区で予想された集落が近隣に存在する可能性を示唆するものであろう。

07-5区と06-15区は遺跡南端部において実施された。調査区の北約100mに位置する府道敷の調査<sup>③</sup>では弥生時代中期の大規模な集落が明らかとなっており、06-15区と隣接する05-8区<sup>④</sup>の調査においても多量の弥生土器や石器が出土していることから、両調査区の内容が注目されるものであった。

07-5区では、確認された地山の状況から調査区は氾濫原と沖積段丘の境界付近に立地するものである可能性が考えられる。また同地区における第5、6層は府道部分の調査における「大溝4<sup>⑤</sup>」の埋土と近似していることから、自然流路の埋土である可能性があり、流路であるとすればルート推定の大

きな手がかりが得られたものといえる。

06-15区では河川性堆積と考えられる基盤層が確認された。南約5mに位置する05-8区第1、2トレンチにおける遺構ベースと対応するものである。西約10mに位置する06-2区<sup>®</sup>においても現代耕作土の直下に同様の基盤層が確認されていることから、05-8区の遺構は本調査区ならびに06-2区までは達せず、両調査区と05-8区までの約5mの間に遺構の北辺が存在することが、さらに確実となった。

次に遺跡北西部での調査をみてみたい。07-6区、07-7区、06-11区はいずれも現男里集落の縁辺部において行われたものである。07-6区は現集落の北東縁に位置する。調査では近世以降に大きく改変されていることが明らかとなり、周辺において確認されている中世集落の拡がりを示すものは、何ら認められなかった。既に削平されたものと考えたいが、確認された地山の状況が若干不安定な様相を示すことから、集落は調査区にまで及んでいなかった可能性もある。

07-7区は現集落の西端に位置する。既往の調査<sup>®</sup>によって、周辺では中世の耕地化に伴う整地層が比較的広範囲で確認されており、今回もその追認が予測された。しかし予想に反して「整地層」をベースとする有牀式平窯が確認されたことにより、同層を基盤とする生活面が存在することが明らかとなった。従来想定されていた整地～耕地化という変遷を再考する必要がある。また本例と同形態を持つ平窯は本調査区の北約300m、男里遺跡北西部<sup>®</sup>、さらに約800m北東に位置する戎畑遺跡<sup>®</sup>において確認されており、今回のものを含めて4例目となる。いずれも中世に属するものであり、戎畑遺跡では13世紀代の土師質真蛸壺を焼成していた可能性が指摘されている。また先の3例では平窯にごく近接した地点より真蛸壺の焼成土坑が確認されている。両者の出土遺物からは平窯と焼成土坑に時期的な隔たりは見出しがたく、相前後した時期に全く異なる焼成技術を採用していることとなる。遺構の構造よりみる限り、平窯を用いた焼成にはより高度な技術や知識を必要としたことは疑いないが、出土する土師質真蛸壺には焼成段階の差異は窺えない。異なる焼成技術を採用するに至った背景を解明する必要がある。また有牀式平窯には瓦窯のほか、古代の土師器や須恵器窯の例<sup>®</sup>があるが、中世の土器生産に供したのものとしては類例が知られず、窯形態の系譜を追うことは困難である。現状知られるように地域的に極めて限定されたものか、さらに広く分布するものか、今後の情報の増加が期待される。

06-10区は遺跡北端部における調査であった。確認された第4層はシルト質の土層に炭化木片などを含み、時期が異なる遺物が混在していた。いずれの時期も周辺で集落が確認されていることから、第4層は周辺からの水流が澱み状に集まった結果、形成された土層なのではないかと推測される。調査区周辺では、99-9区<sup>®</sup>で確認された流路の周囲に同様の湿地が存在していたと考えられ、水田遺構の存在が想定できる。

06-11区は現集落北西縁部に位置する。中世遺物包含層が確認されたが、その堆積はいささか軟弱であり、かつ第6層には拳大の円礫を多く含むことから、中世の生活面そのものが拡がっているかどうかは不明である。地形的に氾濫原や自然堤防の縁辺部にあたるものと考えられ、中世の集落は本調査区よりも東に拡がるものと予想される。

光平寺跡07-1区は遺跡の東縁部に位置する。これまでに周辺での調査例は少なく、その成果が期待された。結果、面的な検出はできなかったものの、廃棄土坑の可能性が高い堆積が確認され、多くの遺物が出土した。遺物には13、14世紀代の瓦類のほか、15世紀代の土器を含む。多量の中世瓦が出土したことにより、調査区が光平寺寺域に含まれる、もしくは極めて近接した位置にあるということ

が確認されたと言えよう。出土遺物の年代観によると、光平寺は（恐らくは12世紀後半の）創建後、13、14世紀にかけて維持され、15世紀以降に伽藍縮小の動きがあったものと推測することができる。今後は寺院そのものの追求は無論のこと、より精緻な時間軸の設定が求められる。

長山遺跡 07-1 区は遺跡中央部近くでの調査であった。確認された層序は、周辺の調査成果と基本的に共通するものであり、中世以降に耕地化されたものと判断されるものであった。今後、耕地開発の開始時期が判明すれば、中世馬場集落の実態解明に大きく寄与するものと期待される。

岡田遺跡では2件の調査を報告している。どちらも現岡田集落の西に広がる耕作地における調査である。両調査区共に粘土採掘によって大きく削平されているものと考えられた。07-2 区では地山下層と考えられる砂礫が露呈し、上層の粘土層はすべて失われていた。こうした粘土採掘の痕跡は周辺において多く確認されており、近代のレンガ生産にかかるものと考えられている。

大苗代遺跡では遺跡北端部において1件の調査が行われた。07-1 区では粘性の強い地山に掘り込まれた遺構が確認された。断面観察ながら土坑と推測されるものである。東に隣接する91-1 区<sup>⑨</sup>では平安時代末から鎌倉時代に属する遺構、遺物が確認されていることから、本調査区はその拡がりを示すものと考えられる。

仏性寺跡では1件の調査が行われた。過去の調査例が少ない地点であり、その内容が注目された。結果、明確な遺構は確認されなかったが、仏性寺跡の北に連なる大苗代遺跡や北野遺跡と共通の地山が確認されたことで、周辺での遺構の拡がりに期待の持たれるものとなった。

兎田遺跡では2件の調査が行われた。07-1 区は遺跡の北部中央に位置する。中世以降に形成された複数の耕作面が確認された。地形的には氾濫原上に立地するもので、中世以前の土地利用は活発でなく、以降も連綿と耕作地として利用されていたことが判明した。

07-2 区は遺跡南東隅に位置する。調査区の西約70 mには中世包含層と遺構ベースとなりうる安定面が確認された06-1 区<sup>⑩</sup>が位置しており、安定面の拡がりを知るうえで、本調査区の内容が注目された。調査では、地山直上に自然堆積するシルト層が確認されたが、薄く軟弱な堆積状況から面として認識されるものではなかった。今回のシルト層と06-1 区でみられた安定面との比高差は約60 cm存在し、06-1 区の方が低い。地山が西にむかって傾斜し、それに伴い砂礫直上のシルト層が厚みを増した可能性が考えられる。

註 ① 昨年度、本市教育委員会による調査。現在整理中。

② 『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅷ』（1991）に調査位置の記載がある。

③ （財）大阪府文化財センター『男里遺跡』（2005）

④ 泉南市教育委員会「男里遺跡 05-8 区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書 X X I V』（2007）

⑤ ③と同じ。

⑥ 泉南市教育委員会「男里遺跡 06-2 区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書 X X I V』（2007）

⑦ 泉南市教育委員会「男里遺跡 06-4、5、6 区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書 X X I V』（2007）など。

⑧ 泉南市教育委員会『男里遺跡発掘調査報告書』（2002）

⑨ 泉南市教育委員会『戎畑遺跡発掘調査報告書』（2005）

⑩ 兵庫県三木市法鑑遺跡【7世紀後半～8世紀初頭の土師器窯】

香川県綾川町すべつと2・6・7号窯【9世紀後半～10世紀前半の須恵器窯】など。

綾南町教育委員会『十瓶山窯跡群すべつと支群』（1994）

岡崎正雄「兵庫県法鑑遺跡の土師器焼成窯」『古代の土師器生産と焼成遺構』窯跡研究会編 真陽社（1997）

⑪ 泉南市教育委員会「男里遺跡 99-9 区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅷ』（2001）

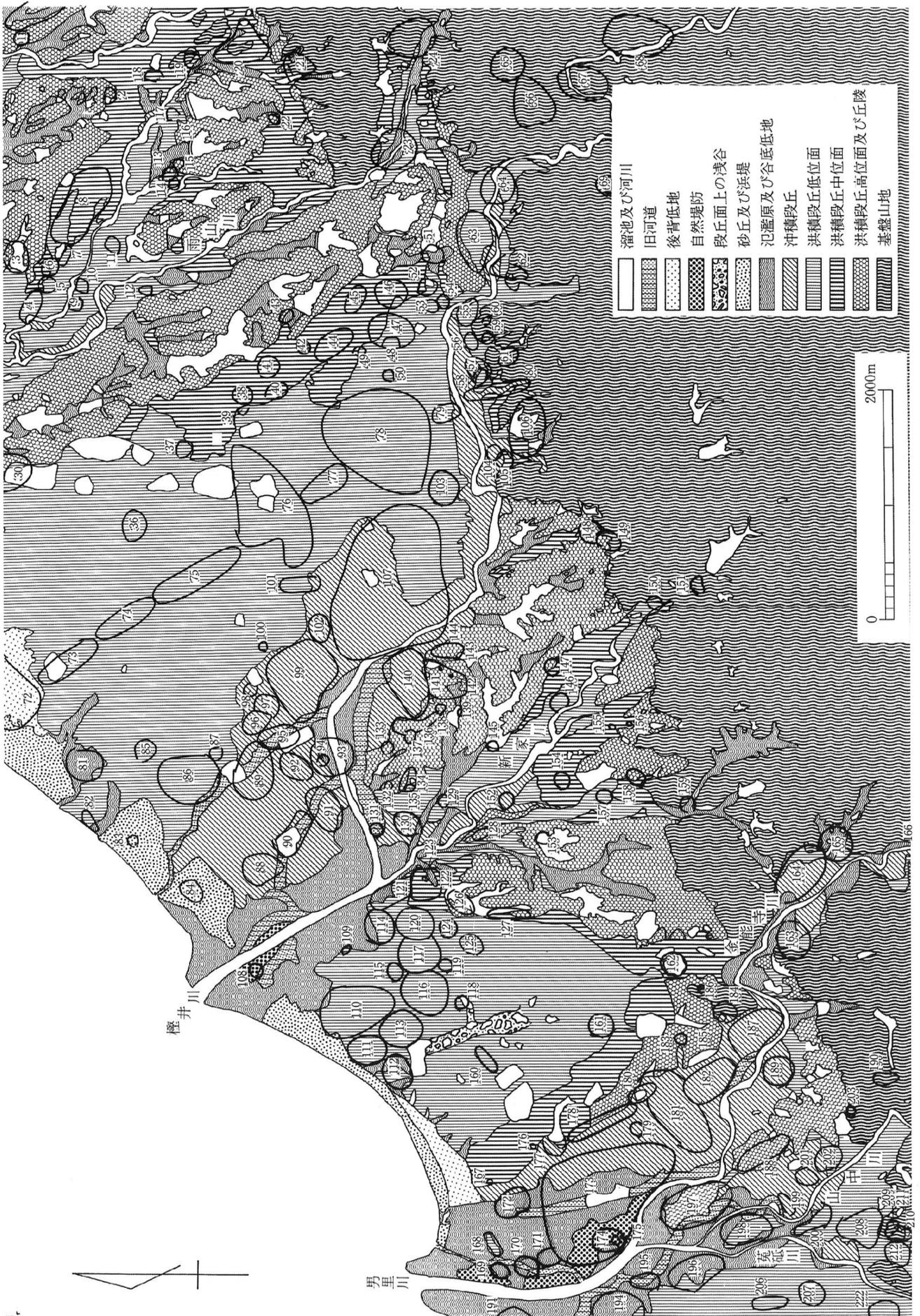
⑫ 泉南市教育委員会『大苗代遺跡発掘調査報告書』（2002）

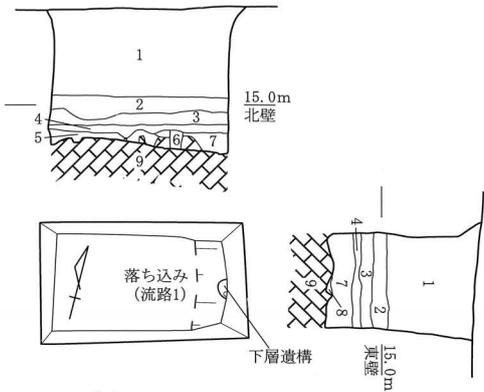
⑬ 泉南市教育委員会「兎田遺跡 06-1 区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書 X X I V』（2007）

第5表 文化財一覧表

1	正法寺跡	47	野々宮遺跡	93	樫井城跡	139	引谷池窯跡	185	林昌寺瓦窯跡
2	小垣内遺跡	48	総福寺天満宮本殿	94	奥家住宅	140	兎田遺跡	186	林昌寺銅鐸出土地
3	大谷池遺跡	49	宮ノ前遺跡	95	道ノ池遺跡	141	フキアゲ山東遺跡	187	岡中遺跡
4	大久保B遺跡	50	垣外遺跡	96	岡ノ崎遺跡	142	フキアゲ山1号墳	188	高田山古墳群
5	下高田遺跡	51	屯田遺跡	97	中菖蒲遺跡	143	フキアゲ山2号墳	189	岡中西遺跡
6	紺屋遺跡	52	八王子遺跡	98	岸ノ下遺跡	144	兎田古墳群	190	雨山南遺跡
7	口無池遺跡	53	慈眼院金堂・多宝塔	99	諸目遺跡	145	池尻遺跡	191	福島遺跡
8	東門寺跡	54	日根神社遺跡	100	城ノ塚古墳	146	中の川遺跡	192	尾崎海岸遺跡
9	降井家屋敷跡	55	西ノ上遺跡	101	禅興寺跡	147	岩の前遺跡	193	馬川北遺跡
10	大久保C遺跡	56	川原遺跡	102	ダイジョウウ寺跡	148	別所北遺跡	194	馬川遺跡
11	中家住宅	57	母山遺跡	103	上之郷遺跡	149	別所遺跡	195	下出北遺跡
12	大久保A遺跡	58	母山近世墓地	104	向井代遺跡	150	高野遺跡	196	室堂遺跡
13	五門北古墳	59	向井山遺跡	105	意賀美神社本殿	151	昭和池遺跡	197	平野寺(長楽寺)跡
14	五門遺跡	60	鏡塚古墳	106	向井池遺跡	152	上村遺跡	198	向出遺跡
15	五門古墳	61	梨谷遺跡	107	三軒屋遺跡	153	狐池遺跡	199	高田西遺跡
16	大浦中世墓地	62	笹ノ山遺跡	108	川原遺跡	154	上野中道遺跡	200	向山遺跡
17	大浦遺跡	63	土丸遺跡	109	岡田東遺跡	155	宮遺跡	201	高田南遺跡
18	甲田家住宅	64	土丸南遺跡	110	岡田遺跡	156	宮南遺跡	202	和泉鳥取遺跡
19	久保B遺跡	65	雨山城跡	111	氏の松遺跡	157	芋掘遺跡	203	雨山遺跡
20	鳥羽殿城跡	66	土丸城跡	112	座頭池遺跡	158	石ケ原遺跡	204	内畑遺跡
21	墓の谷遺跡	67	下大木遺跡	113	岡田西遺跡	159	高倉山南遺跡	205	皿田池古墳
22	来迎寺本堂	68	大木遺跡	114	新伝寺遺跡	160	本田池遺跡	206	正方寺遺跡
23	池ノ谷遺跡	69	稲倉池北方遺跡	115	中小路北遺跡	161	上代石塚遺跡	207	西畑遺跡
24	成合寺遺跡	70	大西遺跡	116	中小路西遺跡	162	信之池遺跡	208	自然田遺跡
25	山ノ下城跡	71	松原遺跡	117	中小路遺跡	163	滑瀬遺跡	209	玉田山遺跡
26	山出遺跡	72	中開遺跡	118	坊主池遺跡	164	六尾遺跡	210	玉田山古墳群
27	上瓦屋遺跡	73	末廣遺跡	119	中小路南遺跡	165	六尾南遺跡	211	玉田山須恵器窯跡
28	湊遺跡	74	安松遺跡	120	北野遺跡	166	金熊寺遺跡	212	寺田山遺跡
29	壇波羅密寺跡	75	長滝遺跡	121	一岡神社遺跡	167	専徳寺遺跡	213	黒田西遺跡
30	壇波羅遺跡	76	植田池遺跡	122	海会寺跡	168	天神ノ森遺跡	214	鳥取北遺跡
31	佐野王子跡	77	郷ノ芝遺跡	123	海会寺瓦窯	169	キレト遺跡	215	鳥取遺跡
32	上町東遺跡	78	日根野遺跡	124	大苗代遺跡	170	高田遺跡	216	鳥取南遺跡
33	市場東遺跡	79	机場遺跡	125	仏性寺跡	171	男里北遺跡	217	黒田南遺跡
34	若宮遺跡	80	棚原遺跡	126	海宮宮池遺跡	172	戎畑遺跡	218	神光寺(蓮池)遺跡
35	上町遺跡	81	羽倉崎東遺跡	127	市場遺跡	173	男里遺跡	219	三味谷遺跡
36	俵屋遺跡	82	羽倉崎遺跡	128	向井山遺跡	174	光平寺跡	220	三升五合山遺跡
37	北尻遺跡	83	嘉祥神社本殿	129	新家遺跡	175	光平寺石造五輪塔	221	小口谷遺跡
38	岡口遺跡	84	道ノ池遺跡	130	下村遺跡	176	樽井南遺跡	222	井関遺跡
39	中嶋遺跡	85	羽倉崎上町遺跡	131	下村北遺跡	177	男里東遺跡	223	石田山遺跡
40	小塚遺跡	86	船岡山遺跡	132	下村1号墳	178	長山遺跡	224	西鳥取遺跡
41	十二谷遺跡	87	岡本廃寺	133	新家オドリ山東遺跡	179	山ノ宮遺跡	225	戎遺跡
42	丁田遺跡	88	田尻遺跡	134	新家オドリ山遺跡	180	前田池遺跡	226	貝掛遺跡
43	新池尻遺跡	89	船岡山南遺跡	135	下村2号墳	181	幡代遺跡	227	金剛寺遺跡
44	大坪遺跡	90	夫婦池遺跡	136	新家古墳群	182	幡代南遺跡	228	塚谷古墳群
45	市堂遺跡	91	樫井西遺跡	137	新家オドリ山南遺跡	183	奥ノ池遺跡		
46	北ノ前遺跡	92	藤波遺跡	138	フキアゲ山西遺跡	184	林昌寺跡		



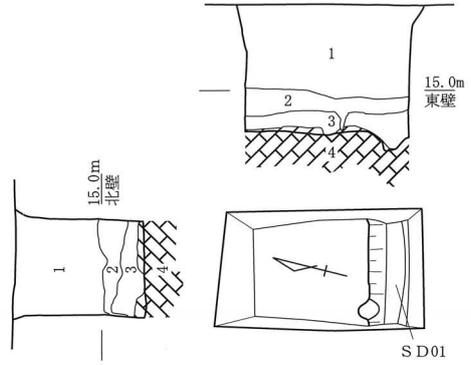




1. 盛土
2. 旧表土
3. 暗灰褐色砂質シルト (耕作土)
4. 淡褐色土 (旧耕作土)
5. 暗褐色混じり淡褐色砂質土
6. 暗褐色シルト
7. 褐灰色砂質シルト (地山ブロック含)
8. 淡暗褐色砂質シルト
9. にぶい黄褐色シルト

○ N07-2区断面図

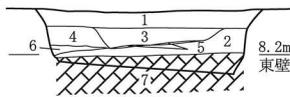
1. 盛土
2. 淡褐色礫混土 (盛土)
3. 暗灰色土 (耕作土)
4. 淡褐色シルト
5. 暗黄褐色混じり淡褐色礫含土
6. にぶい黄褐色礫混粘土



○ N07-1区平面図および断面図

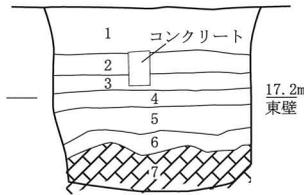
1. 盛土
2. 灰黒色土 (耕作土)
3. にぶい黄褐色混じり淡褐色砂質土 (地山ブロック含)
4. にぶい黄褐色シルト

○ N07-3区平面図および断面図



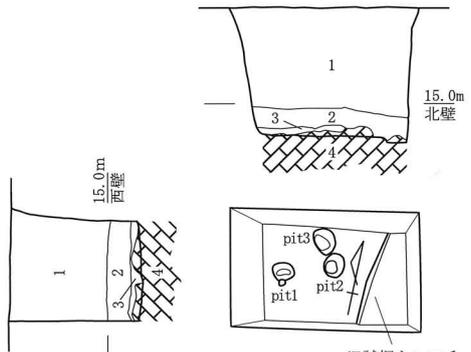
1. 淡灰黒色土 (耕作土)
2. 黄白色礫混砂質土 (旧耕作土)
3. 灰黄褐色砂質土 (6層ブロック、炭少含)
4. 暗灰黄褐色混じり暗赤褐色土 (焼土多含)
5. 炭層
6. 暗赤褐色砂質土 (2層の酸化層)
7. 灰褐色礫混砂質土

○ N07-6区断面図



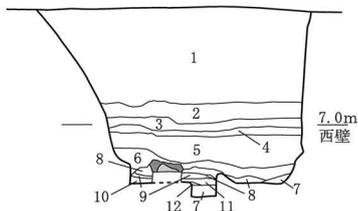
1. 盛土
2. 暗灰色土 (耕作土)
3. 淡灰褐色混じり暗褐色土 (床土)
4. 淡暗褐色砂質土 (Mg粒多含、旧耕作土)
5. 淡褐色混じりにぶい黄褐色シルト (炭少含)
6. にぶい黄褐色礫混シルト (5層近似)
7. 黄灰褐色礫混土 (淡褐色ブロック含)

○ N07-5区断面図



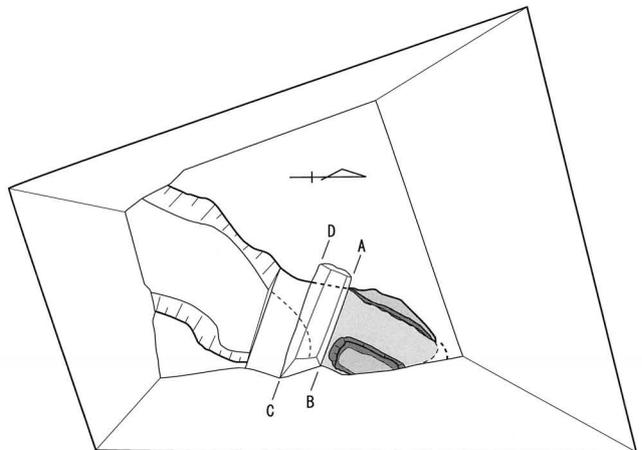
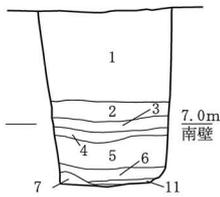
○ N07-4区平面図および断面図

1. 盛土
2. 灰黒色土 (耕作土)
3. にぶい黄褐色混じり淡褐色砂質土 (地山ブロック多含)
4. にぶい黄褐色シルト



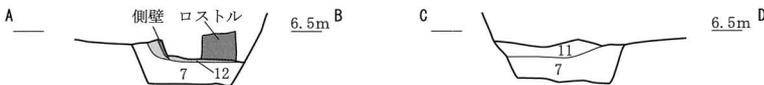
1. 盛土
2. 灰黒色シルト (耕作土)
3. 灰褐色砂質土 (床土)
4. 黄灰褐色砂質土 (床土)
5. 淡褐色混じり灰褐色砂質土 (旧耕作土)
6. 5層に暗褐色ブロック、焼土、炭多混入
7. にぶい灰黄褐色砂質シルト (遺構ベース)
8. 灰褐色混じり暗赤褐色土 (焼土、炭、スサ入窠体含)
9. 暗赤褐色混じり暗黄灰色砂質土
10. 8層と同じ (窠体多含、焼成部分に径15cm以下の円礫多含)
11. 8層と同じ (窠体含まない、土坑部分に炭多含)
12. 暗赤褐色粘土 (焼成部貼床)

○ N07-7区断面図

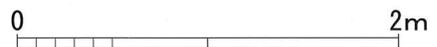


- 明橙色酸化範囲【側壁、ロストル外面】
- 暗褐色酸化範囲【側壁外側、ロストル断面内側、貼床】

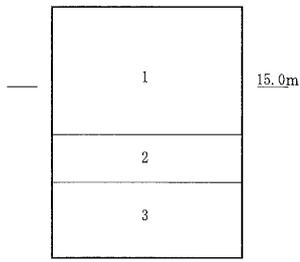
○ N07-7区平面図および遺構断面図



※層序番号は断面図と同じ。

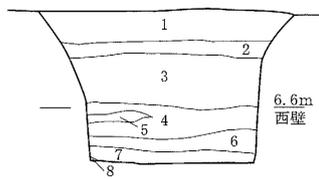


PL.4 男里遺跡②、光平寺跡調査区



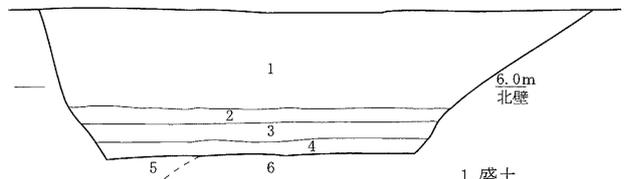
1. 盛土
2. 旧表土 (盛土)
3. 暗褐色礫混土

ON06-12区層序模式図



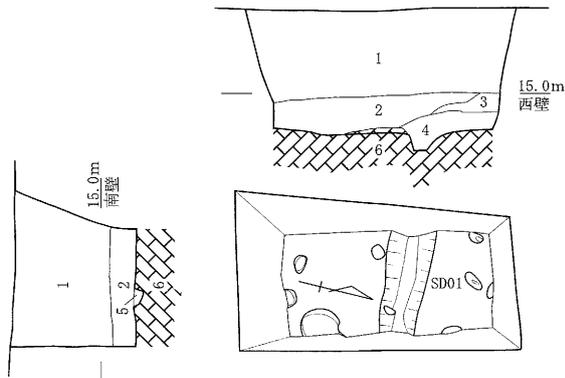
1. 盛土
2. 暗黄色土
3. 暗黄褐色礫混土
4. 淡暗褐色砂質土 (炭含)
5. 淡灰褐色砂質シルト
6. 淡暗褐色礫混土
7. 灰褐色混じり暗褐色砂質シルト
8. 灰褐色砂礫

ON06-11区断面図



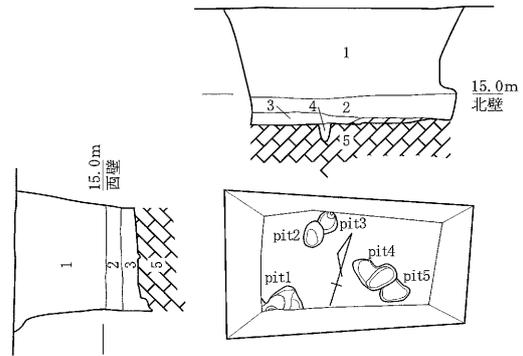
1. 盛土
2. 黒褐色シルト
3. 黄褐色シルト
4. 灰褐色シルト
5. 礫混灰褐色粗砂
6. 黄灰色シルト

ON06-10区断面図



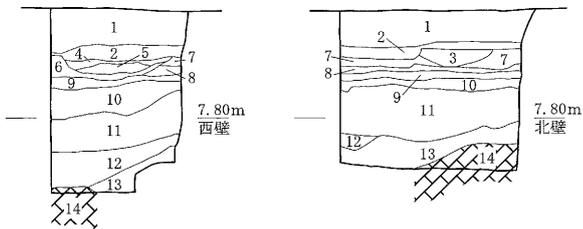
1. 盛土
2. 攪乱 (旧トレンチ埋戻土)
3. 暗灰褐色シルト (耕作土)
4. 淡褐色砂質シルト
5. にぶい黄褐色混じり淡褐色シルト
6. にぶい黄褐色シルト

ON06-14区平面図および断面図



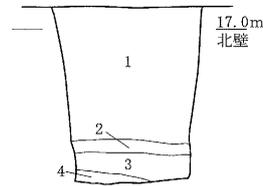
1. 盛土
2. 暗灰褐色シルト (耕作土)
3. 暗灰褐色混じり淡暗褐色シルト
4. にぶい黄褐色混じり淡褐色シルト (地山および暗褐色ブロック含)
5. にぶい黄褐色シルト

ON06-13区平面図および断面図



1. 盛土
2. 淡灰褐色砂質土
3. 灰白色砂質土 (旧耕作土)
4. 7層に2層がわずかに混じる
5. 淡暗灰褐色砂礫
6. 暗橙色混じり淡灰褐色砂質土 (旧耕作土)
7. にぶい黄褐色砂質シルト
8. 橙色混じり明灰白色砂質土 (旧耕作土)
9. 暗褐色混じり暗灰褐色砂質土 (Mg粒多含、旧耕作土)
10. 淡褐色砂質土
11. 暗淡褐色礫混砂質シルト (人頭大円礫多含、炭多含)
12. 暗淡褐色礫混粘土 (人頭大円礫、炭多含)
13. 暗淡黄褐色砂質土
14. 暗褐色砂礫

ON (KH) 07-1区断面図

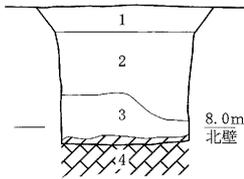


1. 盛土
2. 灰黒色土 (耕作土)
3. 淡黄色礫混土
4. 褐灰色礫混土

ON06-15区断面図

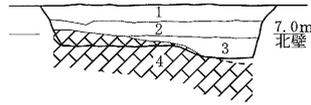


PL. 5 長山遺跡、岡田遺跡、大苗代遺跡、仏性寺跡、兎田遺跡調査区



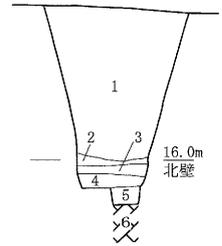
1. 盛土
2. 淡黄白色粘土混じり褐色土 (地山ブロック多含)
3. 暗褐色混じり黄白色粘土
4. 黄白色粘土

OKD07-2区断面図



1. 灰黒色土 (耕作土)
2. 暗灰褐色砂質土 (旧耕作土、下位に地山ブロック多含)
3. 暗灰褐色混じり黄白色粘土 (2層と地山の攪拌層、攪乱)
4. 黄白色粘土

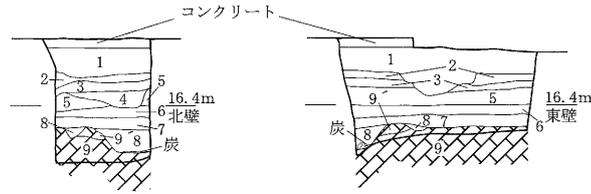
OKD07-1区断面図



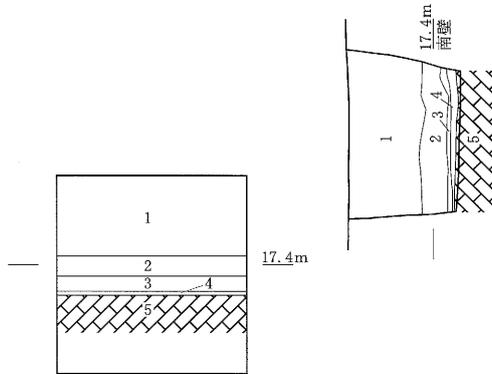
1. 盛土
2. 淡暗灰褐色砂質シルト (耕作土)
3. 橙色混じり明灰白色砂質土 (床土)
4. 黄灰色砂質シルト (床土)
5. 淡灰褐色混じり暗褐色砂質シルト (Mg粒多含、旧耕作土)
6. 淡黄褐色シルト

NG07-1区断面図

1. 盛土
2. 淡灰白色砂質土 (耕作土)
3. 淡灰褐色混じり暗黄褐色砂質シルト (床土)
4. 褐色混じり淡灰褐色砂質土
5. 暗黄褐色混じり淡灰褐色砂質土 (旧耕作土)
6. 灰褐色混じり暗黄褐色砂質シルト (床土)
7. 暗灰褐色混じり暗褐色シルト (上位にMg粒多含)
8. 暗褐色シルト
9. 暗橙色粘土
- 9' 地山上位の変質層、9層比べて黄味が強い

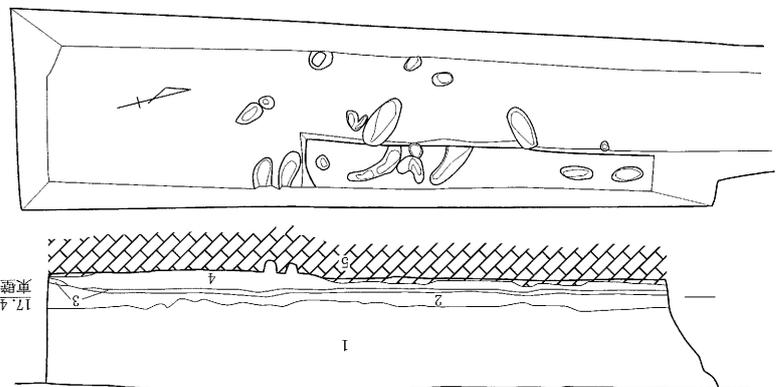


ONS07-1区断面図



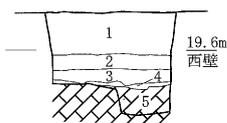
1. 盛土
2. 暗灰色砂質シルト (耕作土)
3. 暗灰白色シルト (耕作土)
4. 黄褐色粘土
5. 黄灰色礫混土

BS07-1区第2トレンチ層序模式図



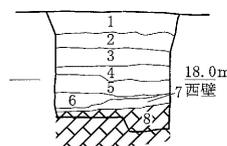
1. 盛土
2. 暗灰色砂質シルト (耕作土)
3. 灰褐色混じり黄褐色粘土 (床土)
4. 褐色混じり暗灰褐色砂質シルト (Mg粒多含、旧耕作土)
5. 橙色礫混粘土

BS07-1区第1トレンチ拡張部平面図および断面図



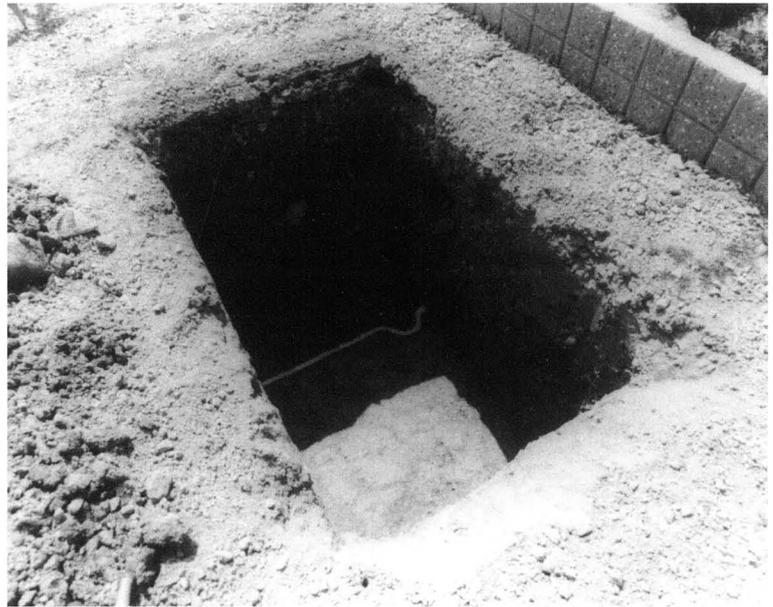
1. 盛土
2. 淡灰黒色砂質シルト (耕作土)
3. 暗橙色混じり暗灰褐色砂質シルト (床土)
4. にぶい黄褐色シルト
5. 暗灰褐色砂礫

US07-2区断面図

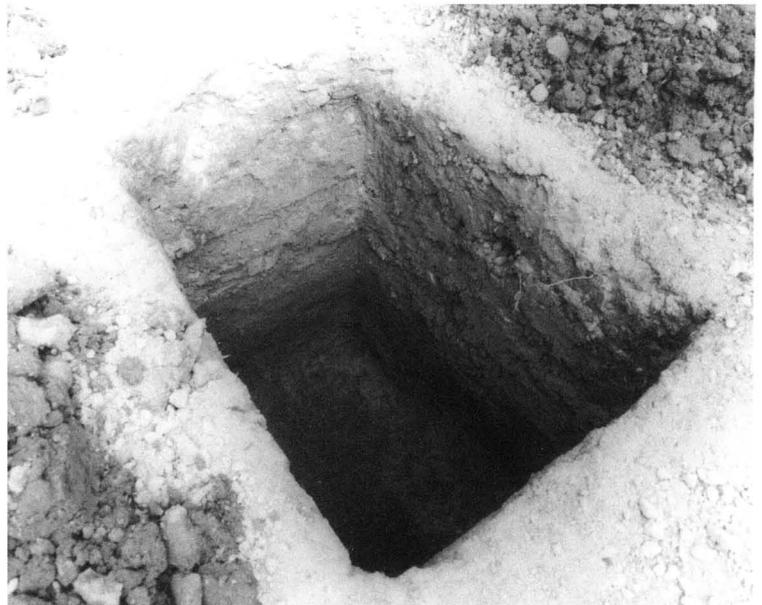


1. 淡暗灰褐色土 (耕作土)
2. 淡灰褐色混じり暗橙色土 (床土)
3. 灰褐色砂質土 (旧耕作土)
4. 暗褐色混じり淡灰褐色砂質土 (旧耕作土)
5. 淡灰褐色混じり淡褐色砂質土 (旧耕作土)
6. 褐色混じり灰褐色砂質土 (旧耕作土)
7. 暗橙色砂質シルト
8. 暗灰褐色砂礫

US07-1区断面図



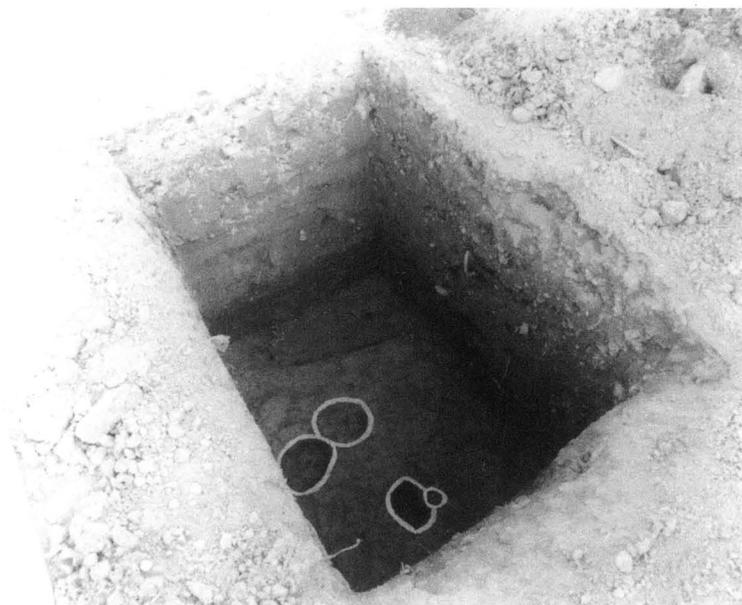
ON 07-1区  
(南西から)



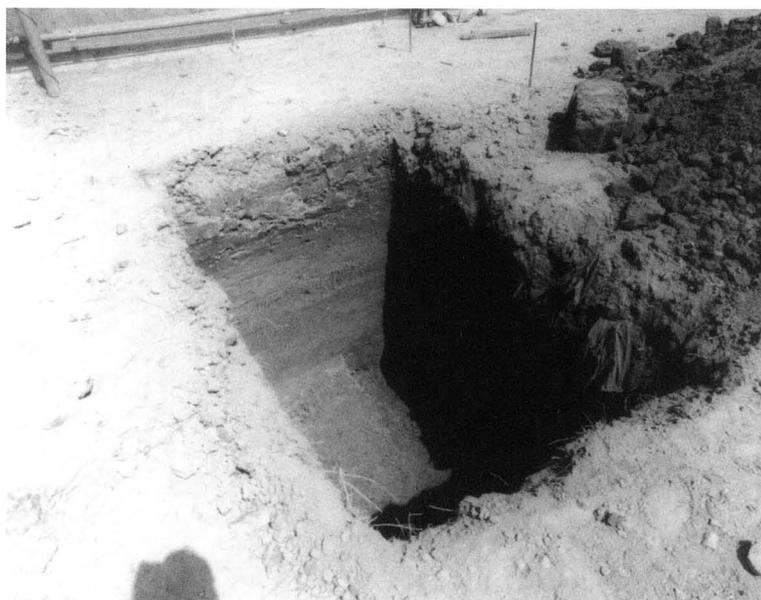
ON 07-2区  
(南西から)



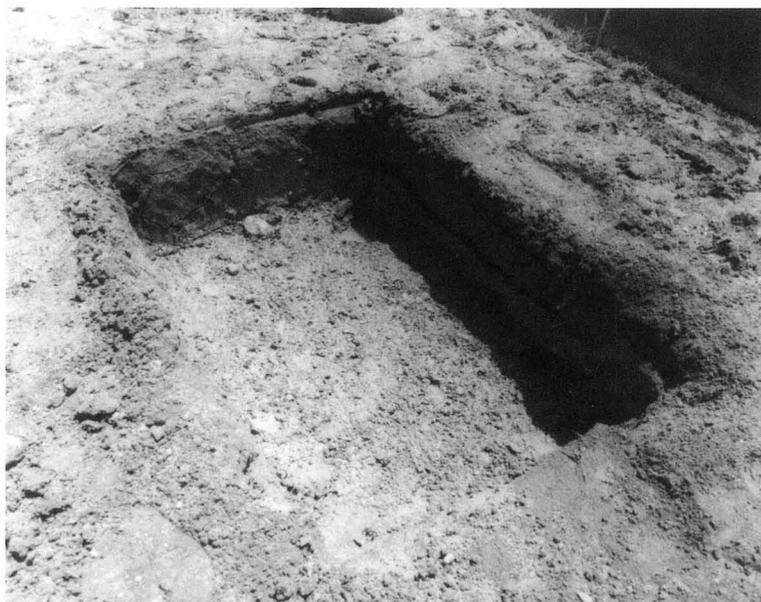
ON 07-3区  
(南東から)



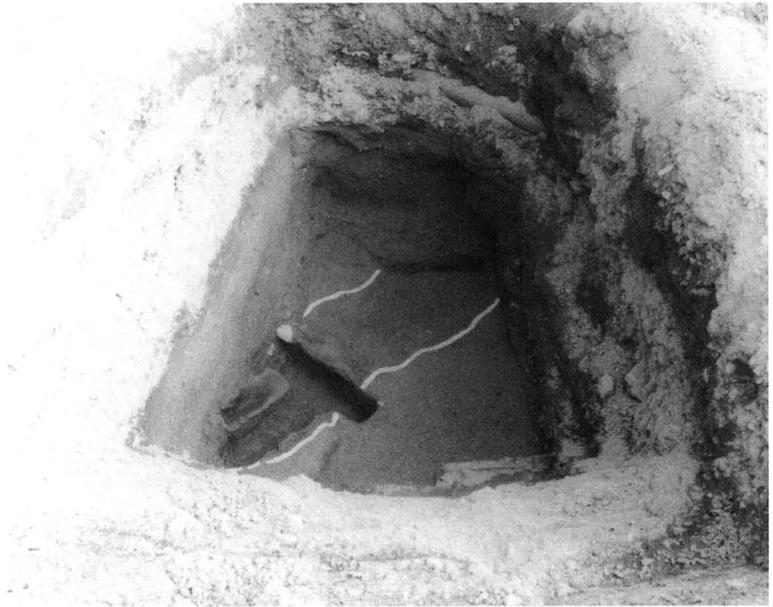
ON 07-4区  
(北西から)



ON 07-5区  
(南西から)



ON 07-6区  
(南西から)



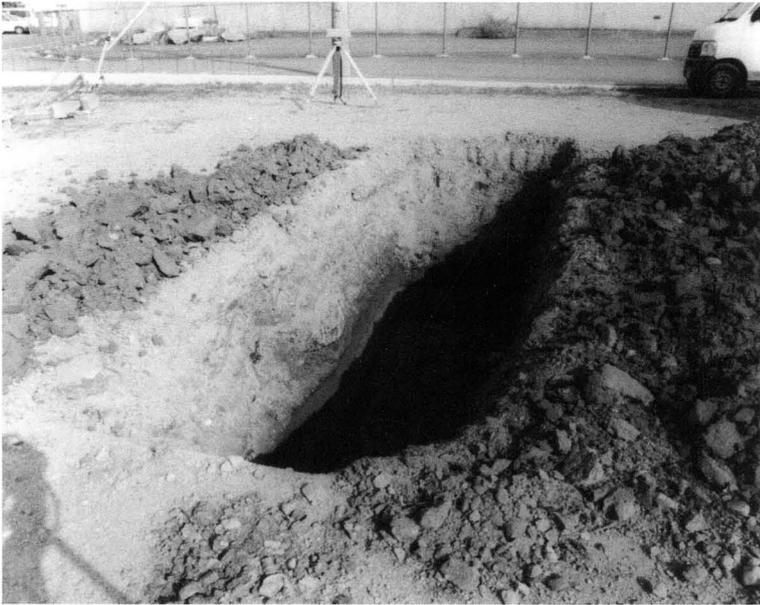
ON 07-7 区  
(北から)



遺構詳細  
(西から)



同上  
(南から)



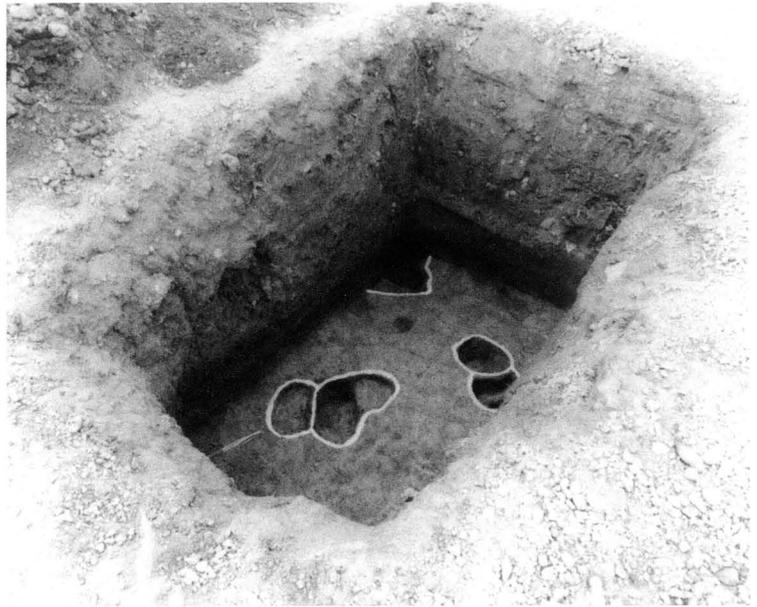
ON 06-10区  
(南西から)



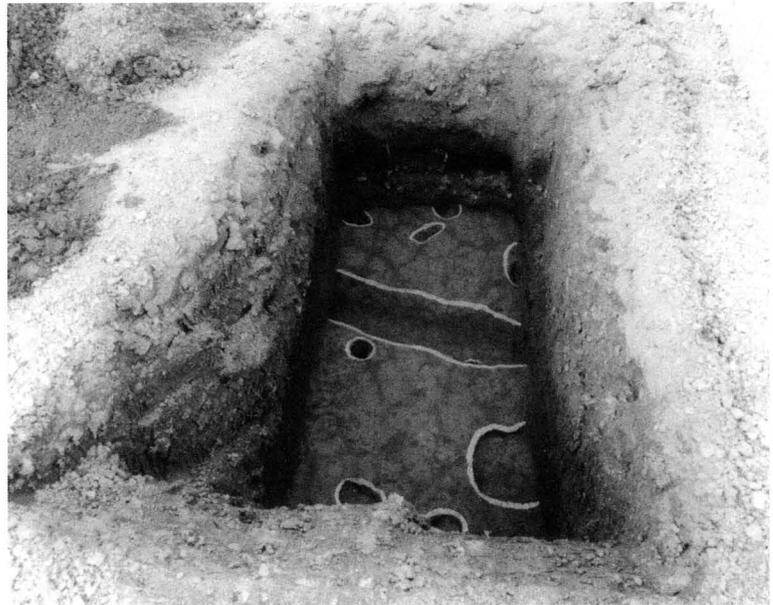
ON 06-11区  
(南東から)



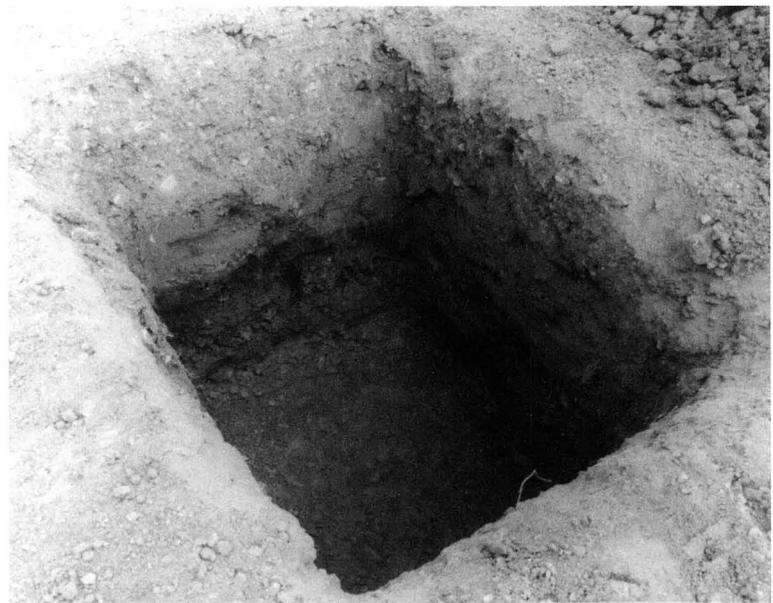
ON 06-12区  
(西から)



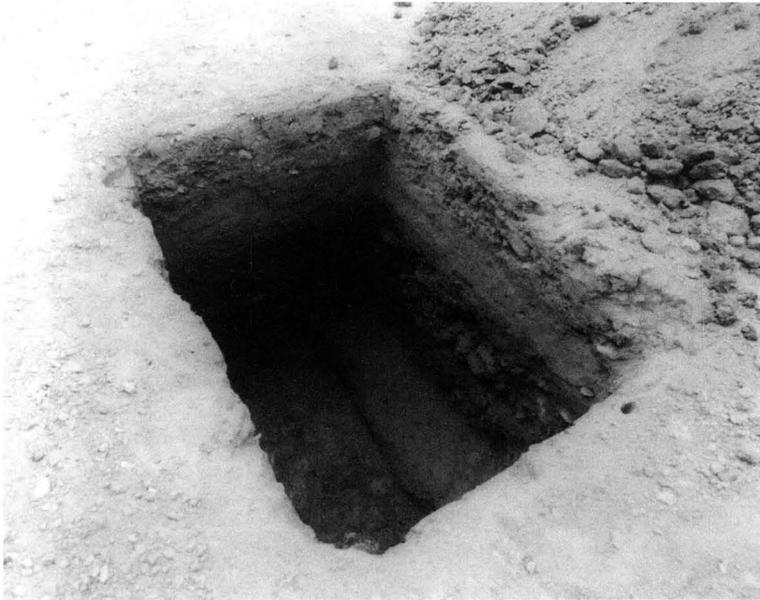
ON 06-13区  
(北東から)



ON 06-14区  
(南から)



ON 06-15区  
(南西から)



KH07-1区  
(南東から)



NG07-1区  
(南西から)



OKD07-1区  
(南西から)

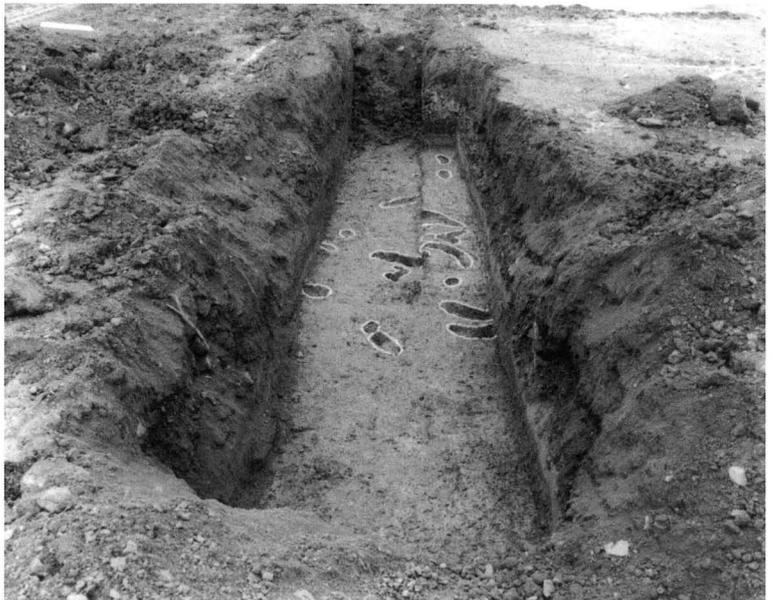
OKD 07-2 区  
(南西から)



ONS 07-1 区  
(南西から)



BS 07-1 区  
(南から)





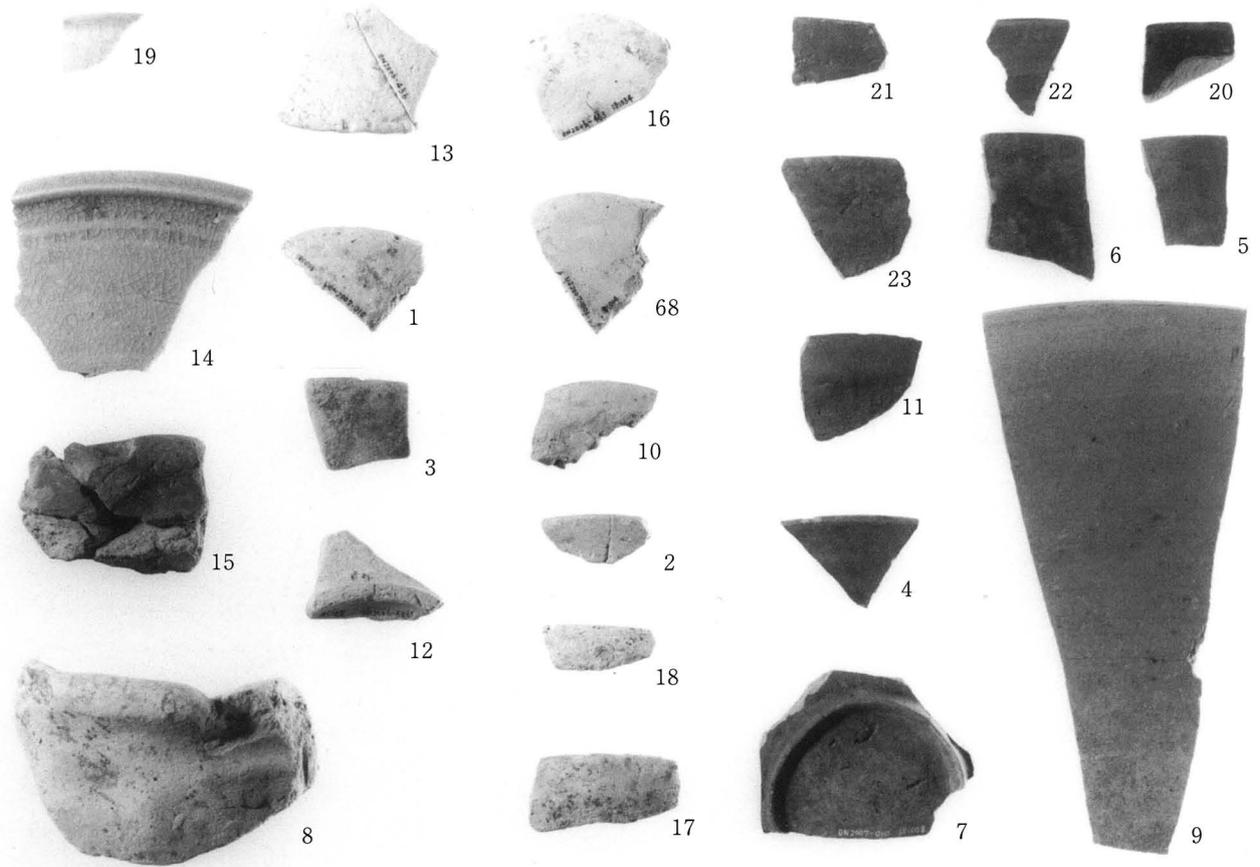
US 07-1区  
(南東から)



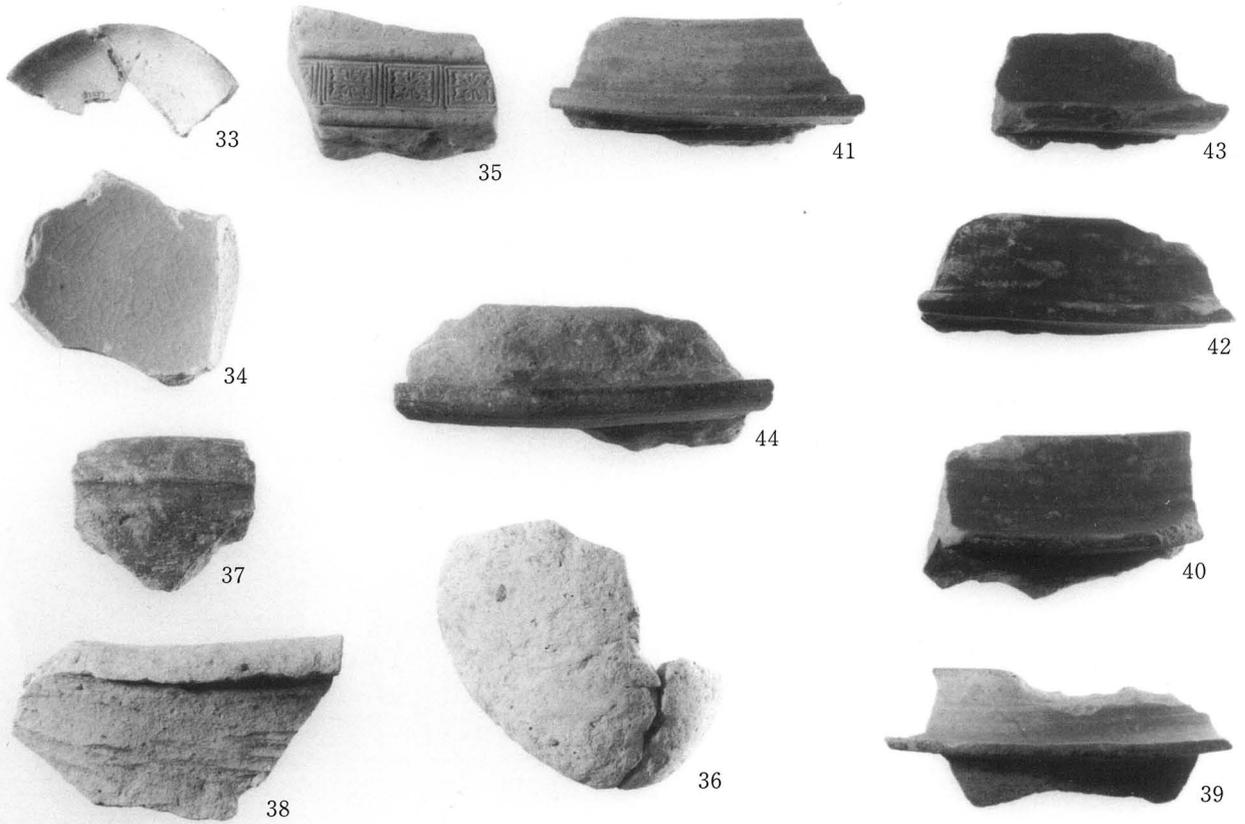
US 07-2区  
(南東から)



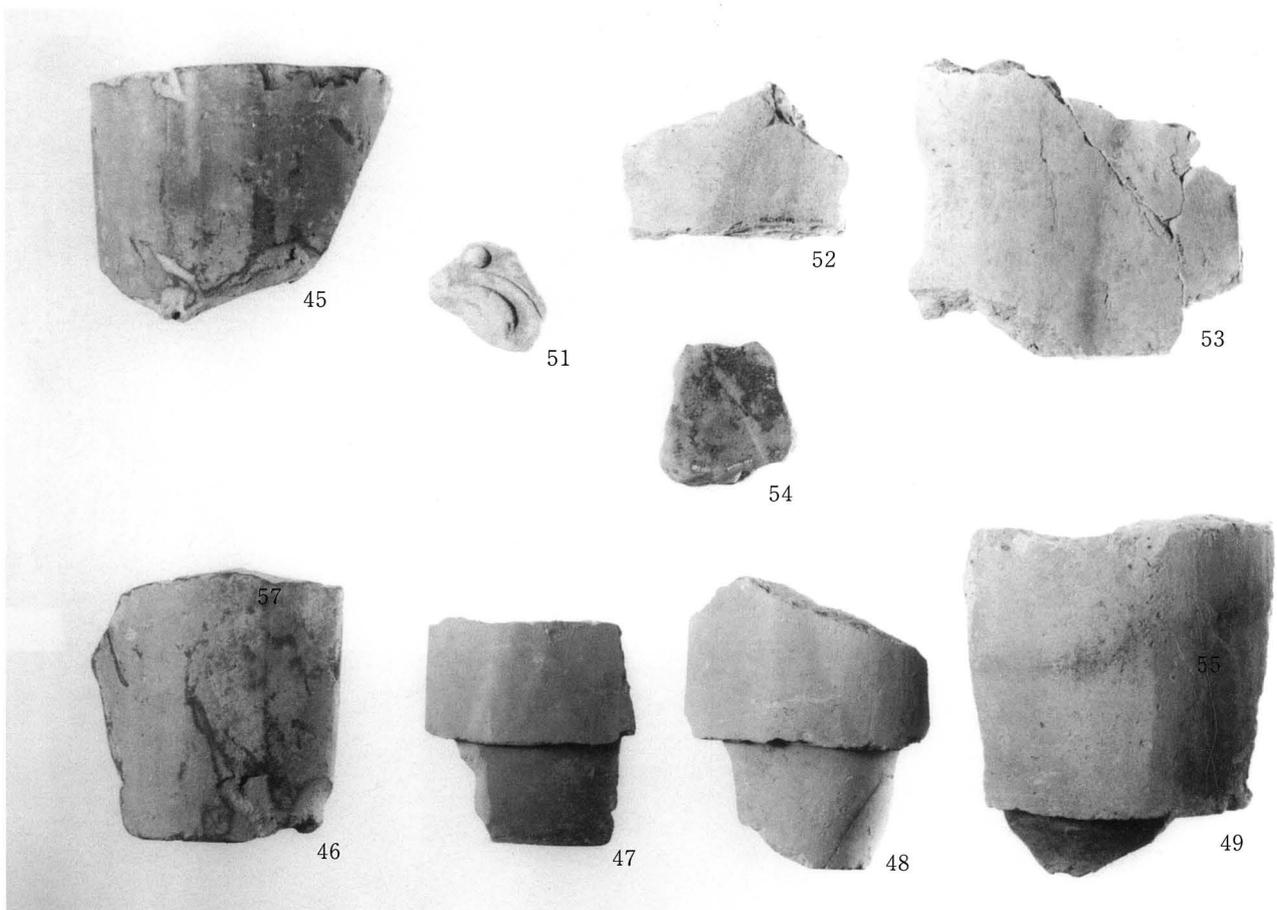
KH 07-1区出土遺物①



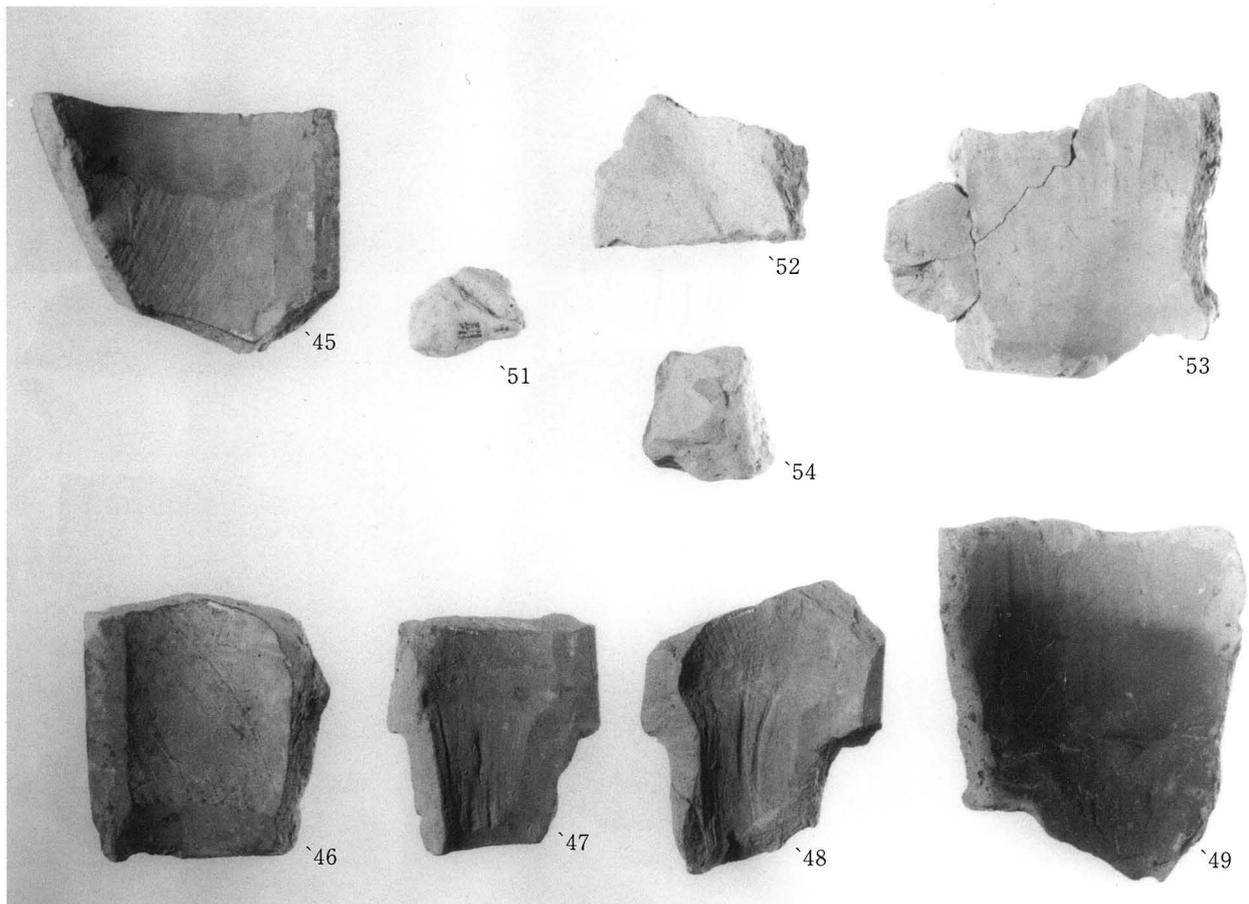
男里遺跡、兔田遺跡出土遺物



KH 07-1 区出土遺物②



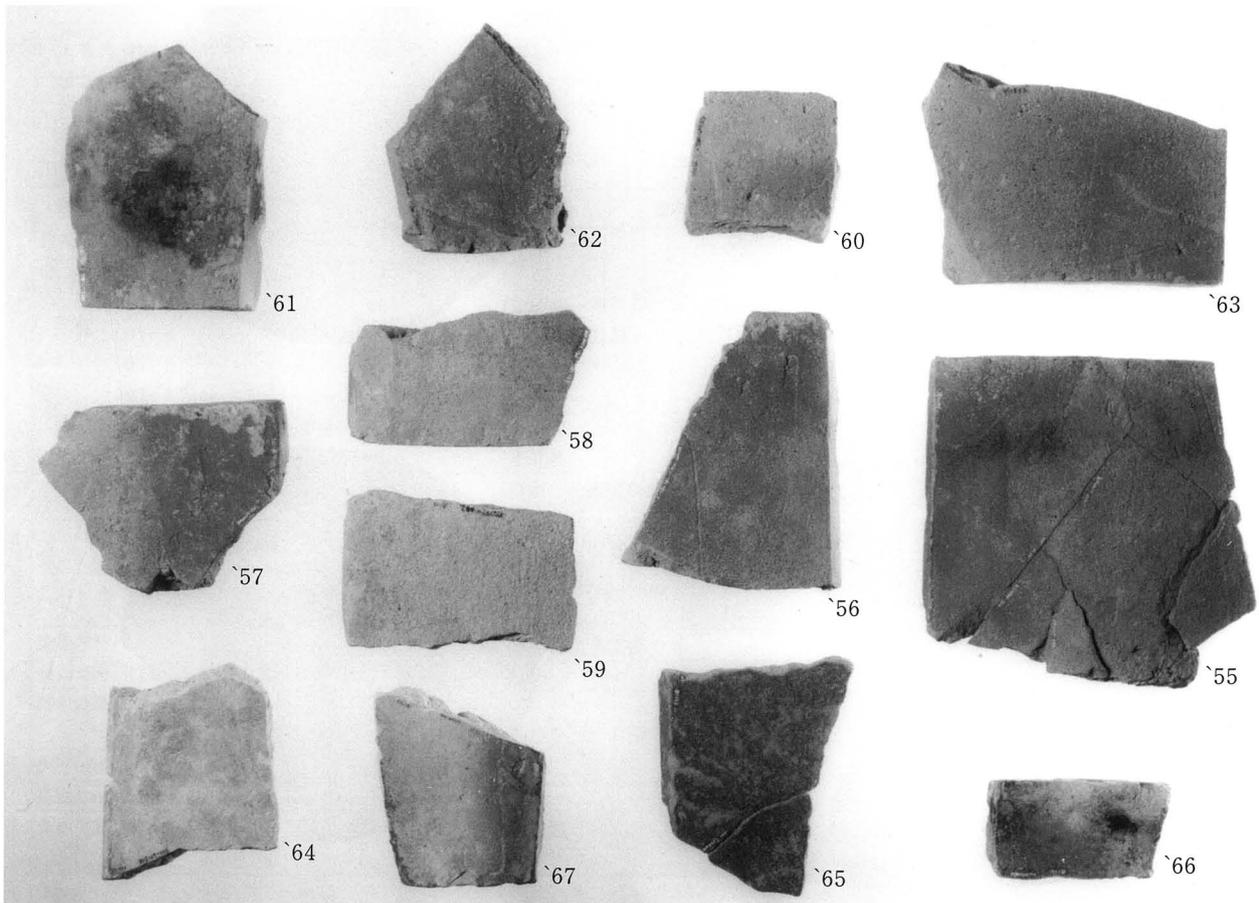
KH 07-1 区出土遺物③



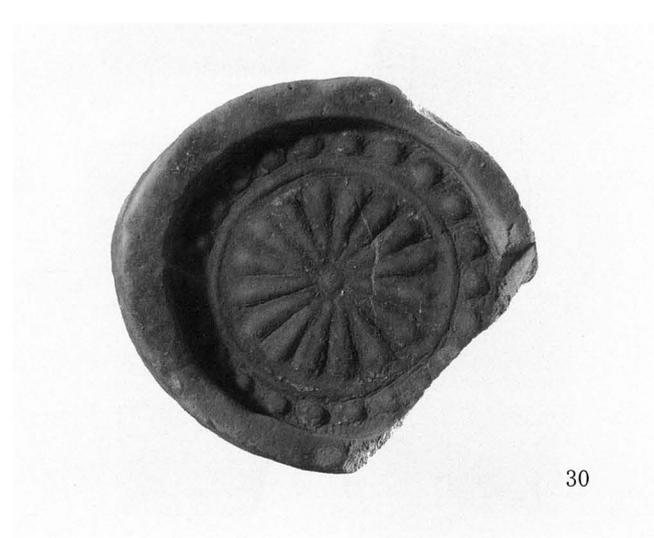
同上



KH 07-1 区出土遺物④



同上



# 報告書抄録

ふりがな	せんなんしいせきぐん はつかつちょうさほうこくしょ 25													
書名	泉南市遺跡群発掘調査報告書													
副書名	—													
巻次	X X V													
シリーズ名	泉南市文化財調査報告書													
シリーズ番号	第 48 集													
編著者名	石橋広和・城野博文・河田泰之													
編集機関	泉南市教育委員会													
所在地	〒 590-0592 大阪府泉南市樽井1丁目1番1号 Tel.072-483-0001													
発行年月日	西暦 2008 年 3 月 31 日													
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北 緯	東 経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因						
		市町村	遺 跡											
おのさと 男里遺跡	おおさかふせんなんしおのさと 大阪府泉南市男里	27228	ON	34 度 21 分 41 秒	135 度 15 分 30 秒	07-1 200610	3	個人住宅						
						07-2 200711	3	個人住宅						
						07-3 200708	3	個人住宅						
						07-4 200710	3	個人住宅						
						07-5 200704	4	個人住宅						
						07-6 200705	4	個人住宅						
						07-7 200706	6	共同住宅						
						06-10 200701	12	店舗併用住宅						
						06-11 200701	4	個人住宅						
						06-12 200701	5	分譲住宅						
						06-13 200701	5	分譲住宅						
						06-14 200701	5	分譲住宅						
						06-15 200702	4	個人住宅						
						こうへいじ 光平寺跡	おおさかふせんなんしおのさと 大阪府泉南市男里	27228	KH	34 度 21 分 20 秒	135 度 16 分 00 秒	07-1 200708	4	個人住宅
						ながやま 長山遺跡	おおさかふせんなんしばば 大阪府泉南市馬場	27228	NG	34 度 21 分 42 秒	135 度 15 分 54 秒	07-1 200708	4	分譲住宅
おかだ 岡田遺跡	おおさかふせんなんしおかだ 大阪府泉南市岡田	27228	OKD	34 度 22 分 49 秒	135 度 16 分 35 秒	07-1 200707 07-2 200710	5 3	個人住宅 個人住宅						
おのしろ 大苗代遺跡	おおさかふせんなんしんだちおのしろ 大阪府泉南市信達大苗代	27228	ONS	34 度 22 分 24 秒	135 度 17 分 03 秒	07-1 200711	3	個人住宅						
ぶっしょうじ 仏性寺跡	おおさかふせんなんしんだちおのしろ 大阪府泉南市信達大苗代	27228	BS	34 度 22 分 18 秒	135 度 16 分 56 秒	07-1 200712	42	介護施設						
うさいだ 兔田遺跡	おおさかふせんなんしうさいだ 大阪府泉南市兔田	27228	US	34 度 22 分 36 秒	135 度 18 分 27 秒	07-1 200709 07-2 200707	3 4	個人住宅 個人住宅						
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項								
男里遺跡 07-1 07-2 07-3 07-4 07-5 07-6 07-7 06-10 06-11 06-12 06-13 06-14 06-15	集落	中世	溝	土師器、須恵器、瓦器、土師質真蛸壺 土師器、瓦器		06-8 区遺構面の拡大 06-8 区遺構面の拡大 06-8 区遺構面の拡大  同形態の有床式平窯として4例目  06-8 区遺構面の拡大 06-8 区遺構面の拡大								
光平寺跡 07-1	社寺	中世		青磁、瓦質土器、瓦		寺域近接地か？								
長山遺跡 07-1	集落													
岡田遺跡 07-1 07-2	集落													
大苗代遺跡 07-1	集落	中世	土坑？			集落範囲の拡大								
仏性寺跡 07-1	社寺													
兔田遺跡 07-1 07-2	集落			土師器										

泉南市遺跡群発掘調査報告書XXV  
泉南市文化財調査報告書 第48集

2008年3月31日

編集・発行 大阪府泉南市教育委員会

泉南市樽井1丁目1番1号

Tel. 072-483-0001

印刷 有限会社 オフィスオオタ&たんぽぽ

泉南市信達大苗代1138-12

Tel. 072-482-1146

